
少年よ、　　を抱け　～風木和真の場合～

仮名文

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年よ、
を抱け
～風木和真の場合～

【Zコード】

Z8638Q

【作者名】

仮名文

【あらすじ】

風木和真・十七歳。周りに紹介できるくらい女に縁がある反面、近すぎるその距離により女難の日々を余儀なくされてきた彼は、何の前触れもなしに異世界へと召喚されてしまつ。そこで早速語られる召喚理由は、世界征服を企む魔王退治でも、迷宮に隠された秘宝探しでもなく　は？　子作り支援？！　即行拒否つても帰れない、帰るために更なる苦難を乗り越えなくてはならない和真は、苦手意識を（半ば強制的に）克服するべく、今日も今日とて美少女たちに囲われる。嫌いではない、苦手なだけだ！　と青白い顔で豪語す

る和真の行く末は果たして 。 話の進行上、ハーレムとエロと下ネタに走る予定です。苦手な方は未読をおすすめします。また、主人公がガツガツしておりますので、その手の期待にも応えられません。予めご了承下さい。

夢を夢見る少年

その日、一人の少年が、”異世界”なる場所から召喚された。黒髪黒目、容姿は端麗でもなく平凡、もつと言えば貧相、そして童顔。

辛うじて少年を、この世界で通用する男としていたのは、それでもギリギリラインの身長だけ。

だからこそ、彼を一目見た者は全員が落胆した。

召喚した責任者が言うには十七らしいが、それにしたってこんな子どもが、果たして自分たちの益になるものか。

が、何の前触れもなく、知らん土地に召喚された少年にとつては、益以前の問題である。

というか、彼はまず、召喚された先が異世界、といつこの現実を否定した。

でもって、彼は兎に角、これは夢である、という主張で自分を納得させた。

でなければ、半狂乱に陥つていただろうから。

何せ彼は、つい先程まで友人らとゲーセンで遊んでいた真っ最中。

それがいきなり、厳つい銀の鎧を纏つたむき苦しいコスプレ野郎と、明らかに外国人風の老人が数人、黒だか白だか判らん魔術めいた怪しい服を着て、自分を取り囲んでいるのだ。

直前まで格ゲーに勤しみ、座つていたがために、したたかに尻を打つ羽目となつた自分を、得体の知れない変質者集団が上から見下ろしてくる図。

周りを見渡しても石造りの部屋が広がるばかり、あれだけ大音量で鳴り響いていたゲーセンの音も一切がかき消されていたら、本

辺にもひ、心うつて良いか判らなくなつてもんだひ。

代わりとばかりに、ペチャくちや唾液混じりの音が至る所で聞こえてくれば、それが彼らの言葉と理解するまでに数分かかり、その数分で少年は、これは夢だ、と半ば強引に自分を納得させたのだ。何よりも自分自身（主に精神面）を守るために。

そういうしてこる内に、厳ついコスプレ野郎で両脇をがつちり固められてしまつた少年は、魂を半分、空想のお花畠に飛ばしながら、ある広間まで連行されていく。

とんと背中を押され、ふらふら歩けば、田の前にはこれまで外国人な、王様コスの渋いオッサンが、絶妙な距離感と高さのある場所で、立派な椅子に座つている姿があつた。

しかもこのオッサン、なんだか威厳つぽいものまで感じられて仕方がない。

常日頃、母親に喰われ氣味の父親を見てきた少年は、そんな男らしき姿に「おお……」と意味もなく声を上げると、なんとなく正座してみせた。

オッサンは少年の行動に、なにやら感嘆詞っぽい声を上げると、満足げに笑んで言葉を発した。

それはそれは、見た目通りのイイ声で。

「えるまねるももたん、によるにゅ」

それはそれは、オッサンの全てに似つかわしくない、氣の抜ける言語で。

「…………」

破壊力は、抜群だつた。

「えるまねるもも、にゅにゅにゅにゅらん?」

「…………」

再び、理解不能、といつも理解をあまりしたくない言語が、男の目から見ても格好良いと思えるオッサンからやつて來た。

あごひげを擦る姿は、かなり様になつてゐるといつて、疑問符をつけたことによつて、より一層、頭が沸きそうな感じに仕上がつてゐる言葉の響き。

どうにも我慢できず、少年が助けを求めるように辺りを見渡せば、王様コスのオッサンの横、今になつて気づいた、こちらを胡乱げに眺めている美少女が、翳した扇越しに何事か言つ。

「るれいろるな、りりやれめむらわ、へん」

（……へそ？）

聞いたことのある音に合わせ、少年の視線が学ランの上から自身の腹に向けられる。

するといきなり周りがざわめき、何だ何だと顔を上げれば、怪しい魔術師装束の老人が、酷く慌てた様子で近づいて來た。

凶器となりそうな、棍棒紛いの木の杖を持つて。

思わず仰け反れば、思い切り振り被られるソレ。

（殴られる！）

そう思つた瞬間、少年の脳裏に浮かんだのは、辞世の句でもなければ、今生との別れの予感でもない。

（つて、何で他の屈強そうな奴じゃなくて、こんなヒヨロージジイに黙つて殴られなきやならねえんだよ…）

今まででは夢だからと成り行きに任せってきたものの、そこだけは譲れなかつた少年。

杖が振り下ろされるのとほぼ同時に、ジジイに向かい、正座で少し痺れ気味の蹴りを繰り出せば、枯れ木のよつた腹に命中する。直前、ピタッと止まつた杖からチカチカした光が降り注いだのを、遅れて認識した少年は、杖は殴るためではなかつたと、蹴つた後で

知つた。

と同時に、いきなり耳に入つてくる、聞き慣れた言葉の数々。

「長あつー、長が、長が春告の姫に……」
「「じ乱心、「じ乱心、姫が「じ乱心なされた……」
「おお、「の国はもう終わりじゃ……」
「世界の破滅は、すぐそこまで来ているといつのかー……」
「くつ、長! 貴方の跡は私が必ずつ……」
「し、死んだらんわ、愚か者どもつ……！ それ以前に、何故、誰もワシに手を貸さんつ……！？」

わーわー騒ぐ周囲に対し、少年に蹴られたジジイこと長が、痛みに掠れた声を上げた。

しかし、元々ない声量は騒ぎに搔き消され、聞いてしまった少年は罪悪感交じりに、長へ手を差し伸べた。

「お、おお、申し訳「じぞこませぬ、春告の姫」
すると、蹴り上げた少年に礼を述べて手を取ると、恭しく頭を下げてきた。

何なんだと訝しく思えば、煩かつた周りが、しん……と静まり返つていていた。

改めて辺りを見渡した少年は、もう一度、何なんだと怪訝な顔をした。

長が頭を下げた途端、広間にいる全員が全員、膝をついて頭を下げてきたのである。

先程は高みから椅子に座つて出迎えたオッサンも、席を立つて他同様、頭を下げていた。

唯一頭を下げていないのは、扇で顔を半分隠したままの美少女のみ。

まるで、オカルト集団から「」神体扱いされているような現状に少年は慄き、答えを求めるように、態度の変わらない美少女を見やれば、何故か睨まれた。

自分とそう、齢の変わらなさそうな少女とはいえ、まずお目に掛かれない類の美少女の眼力は、少年を更に怯ませる。

と、これに気づいたオッサンが、美少女を見咎めと、そのまま地響きになりそうな声で言った。

「ライシオーネ。一介の巫^ふが、長の認めた姫をして面を上げたままとは何事か」

（……ああ、なるほど。さっきの光は、俺がコイシラの言葉を理解するための）

それまでのふにゃふにゃした言語とは違い、オッサンの見た目をなぞる、威厳溢れる言葉を聞いた少年は、ようやく杖から出てきた光の正体を知った。

全ての事柄において、一步遅れを取る少年だが、これはただ単に、目の前で起こっている事象を、夢で片付けていたせいであり、決して彼の理解が遅いわけではない。

かといって、そんな少年の、表に出ない混乱をライシオーネと呼ばれた美少女が判るはずもなく。

「ふんつ

それだけ残して、広間の奥、椅子の後ろへとライシオーネが引っこんでいったなら、「ライシオーネ！」と奢めたオッサンが、立ち上がりかけた身体を、慌てた様子で再度、少年へ向けて膝を折つてきた。

どうやら、娘らしきライシオーネを追つよつも、少年への義理立てのほうが優先されるらしい。

悪い気はしないが、居心地はすこぶる悪い。

広間を出る際、こちらを凄い目で睨んできたライシオーネを見て

しまつたなら、尚更であった。

（つつても、夢だら、コレ。いい加減、目覚めてくれねえかな、
(俺)

「ライシオーネに、またしても怯えてしまつた自分を誤魔化すよう
に、少年はそんな事を思いつつ頭を搔く。

と、一定の距離を保つて近づいてきた長が、頭を下げるまま言つ
てきた。

「春告の姫……重ねて申し訳ござりませぬが、これは現実でござ
ります」

「……は？ 何言つてんだ、ジーさん？」
まるで心を読んだかのよくなタイミング。

つこつとい素で聞けば、ジーさんと呼ばれた長は、更に頭を低くし
て言つ。

「姫の御言葉、確かに御尤もではござります。ござりますが……ど
うか、諦めて下され。姫は我らが希望。ゆえにこの地へお招きした
のです」

そんなこんなで長は、未だ眼前に広がる全てを夢で片付けようと
する少年に、彼を召喚したと、そうしなければならなかつた理由
を、かなり端折つて説明してきた。

続き、この世界において、召喚までした少年に頼みたい事を告げ
る長。

対し、少年の答えたるや。

「これは、夢なんだああああああああああああああああああ
ああああああああああつ……」

制止を叫ぶ声を避け、入ってきた扉を蹴破った少年は、今し方聞
いた事を搔き消すように耳を塞ぎながら、長い廊下を駆け抜けてい

つ
た。

夢を夢見る少年（後書き）

初めまして、仮名文と申します。

少年主人公の長編を今回初めて投稿してみました。
のんびり進めていく予定です。

書くまでもりませんが、のつけから殻に閉じこもってしまった彼
が、今作の主人公。

少しでも楽しんで貰えたら嬉しいです。

逃避したい現実

これは遡ること数日前、日頃から女にガツガツしている友人の一人が、風木和真へ振ってきた会話の一端である。

「あー、どつかにイイ女いねえかなあ？ なあ、和真クン」

「……何でイの一番で俺に振るんだよ」

四、五人からなる友人の内、一番色んな意味で軽そうな少年が、和真の肩を叩いてきた。

不気味なほど白い歯を輝かせた少年は、すげなく扱われた手を上げると、大げさに肩を竦めて表情を暗ぐする。

「そりゃあ勿論、決まってんだろ？ こんなかでフリーの女に縁があんの、お前だけじゃん。アイツとアイツはまだ遊ぶ気のないお子ちゃん、あの野郎は天下の幼馴染様がいらっしゃる」

「天下の幼馴染……ああ、あの」

「そう、あの。昨日も夜這いされたらしいぜ？ くうーつ！ 羨ましい！」

「そつかー？ 同い年で魔女コス、しかもマント下は全裸の女なんて、丸つきり変態じやねえか。俺は奴に同情するね」

「何を言う！ あんな可愛い子、滅多にいないってのに！」

「可愛ければ、多少 いや、かなりのイタさは目を瞑んのか？」

「応！」

「……俺はバスだな」

話題の映画を暇つぶしに見に来たはずなのだが、気づけば少年が

指差した三人と、距離が開いていた和真。

これさえ詰めたなら、この鬱陶しい奴も諦める、そう思ったのも束の間。

早足を仕掛ける直前で再度ガツと肩を掴まれば、少年の鬼気迫る血走った眼にかち合い、喉の奥が引き攣るのを感じた。

「かーすまくうん？ 話を逸らすなよ。俺は他の誰でもないお前に言つたんだ。女紹介してくれつて。姉と妹、幼馴染にいとこの若奥さん……ほおら、近場だけでもこんなに」

「いや、若奥さんつて。いきなりフリーじゃねえし。人妻は駄目だろ、人妻は」

「いやいや、俺的には全然問題ない」

「お前に問題があるからな」

「そつそつ……つて、何言わせんだよう！」

振り被られる手。

やり過ごしても少年の追及は止まず、「で？」と期待に満ちた視線を送つてくる。

溜息をついた和真は、前を行く三人に目をやると、仕方ないと言った調子で少年を見ずに言つた。

「紹介……してやつてもいいが

「おおー！」

「ただし……俺の話を聞いてからでも、して欲しいんだつたら、だけどな

「おお……？」

言いたい事が判らないのだろう、目を丸くさせた少年に、和真はもう一度溜息をつくと、おもむろに口を開いた。

少しだけ、遠い目を空に流しながら。

「とりあえず、お前が言つた四人だが」
「うんうん

「俺が一番オススメしない四人組みだ」

「うん うん？」

「何でかつてえと、まずは俺の姉、明美。^{あけみ} お前も会ったことがあるから判るだろ？が、アイツはあの通り、外では理知的な才女を気取つてゐる。が、休日の過^いし方は世間一般が認めるような女じゃない。下着姿で平氣でうるつくわ、目の前でケツは搔くわ屁はこくわ、はつきり言つちまつと性別間違つた中年オヤジだ。アイツと比べたら、親父なんか乙女に分類されちまう」

「親父より中年オヤジ……い、いやでも、あのプロポーションで下着姿つてのは」

「じゃあお前、ここの話はどう思つよ。初めて部屋に連れて來た彼女、イイ雰囲氣でキスの一つでもしそうな予感。幸い、家には誰もいない。もしかしたらこのまま先まで、なんて柄にもなく甘酸っぱい気分に浸ついたら、うつすら開いていたドア。嫌な予感がして開けてみりや、出歯亀宜しく、デジカメ片手に現れる姉。いやー、思つたより早く帰つて来れたさ。え、これ？ 記念よ記念、貴重でしょう？」弟の筆下ろし

「何か……悪い」

視界の端で、友人の軽そうな頭が頃垂れた。

これへ「いや」と短く返した和真は、続けて妹の話をしていく。

「次に俺の妹の詩織^{しおり}」

「ああ、詩織ちゃんね。あの子、可愛いよな？ 俺らに挨拶するだけでも、顔を赤くして恥しがつちゃつてわ。お前の後ろに隠れてお兄ちゃん助けて、みたいな？」

「……その陰で、延々呪詛吐いててもか？」

「は？」

「死ねから始まつて、たとえばお前相手なら、軽い頭に羽でも生えて首が千切れちゃえればいいのに、あのピアスに重石をつけたらどれくらいの重量で千切れるかな、うふふ、とか」

「べ、別の人でお願いします」

すっかり顔を青ざめさせた少年に、そうだろうとも、と頷いた和真は、疲れきった表情で薄く笑つ。

「で……ああ、幼馴染だつたな。幼馴染といえば、明日香か」
「お、おうー 元気だよなー、アイツー 他にも結構狙つている奴がいてさ」

「元気過ぎるのも考え方のだぜ? ちょっと遭う度に、空手部所属のパンチが、男相手だからって手加減抜きで炸裂」

「おふつ」

「あまりの痛みに怒れば逆ギレし、かと思えば泣き出して周囲の同情を誘い、結果、俺一人悪者」

「うわー」

「それでも対策としてどうにか回避を試みたなら、執拗に追つくる暴力の波。空振りを経て鋭くなつた一撃は、普通に喰らうよりも重く苦しく」

「……い、いとこは? 若奥様はどうなんだよ? 四人の中で唯一結婚しているだろ?」

軽くとも、友人の性癖は至極真つ当らしい。

そこにだけ光を見出した和真は、しかし、へタな鉄砲も数打ちゃ当たると言いたげな振りに、憐憫の目を向けた。

「確かに清香姉ちゃんは、この中じゃ一番まともかもしない。のほほんとした空氣、溢れる母性、穏やかな性格」

「おおう。そうだろう、そうだろうとも」

「だがな、ああいうタイプが怒らせると一番怖いんだ。あれはそう、お前みたいな、いかにも軽薄そつた彼女の旦那が、当然の如く浮気した時だつた」

「……どさくさに紛れて、扱い酷いじゃねえか、お前の中の俺」

「清香姉ちゃん、笑つてたなー」

「ナチュラルに無視か。……ん？ 笑つてたつて？」

「ああ。笑つて 旦那に色んなモン盛つてた」

「い、色んなモン？」

「そう。口に出せない色んなモンを。時には男として致命的になる薬なんかも、ちょちょいのちょいと」

「それって犯罪」

「知つてるかー？ 犯罪つて、バレなきゃ 犯罪にならないらしいぜ？ 清香姉ちゃんがそう言つていた……。そして旦那は自信を失くし、大人しくなつたそつな」

「…………」

これにてお開き、と言わんばかりの節で締めくれば、絶句した少年が項垂れた。

この様子に心の中で（勝つた）と虚しく思つた和真。

するとぽんつと叩かれた肩。

見やれば憐れむ目に迎えられてしまつ。

「和真……お前、女運悪過ぎ」

「……ほつとけ」

軽く受け流しはしたものの、自覚している分、友人の言葉は和真の心にぐっさり突き刺さつた。

女運が悪い、女難が続いている そんなの百も承知だ。

それでも和真は生まれてこの方、そういう女に囮まれて育つてしまつたのだ。

友人のように、女に夢見る、なんてことは在り得ない人生だった。

ちなみに。

そんな人生を語るくせに、彼が進んで彼女を作つたのは、偏に思春期特有の焦りからであった。

または日本人特有の、周りから置いてゆかれる状況への恐怖から、

女を知らなければいけないと思ったのである。

そうして付き合い始めたのは、軽そうな友人をまんまと女にしたような少女。

和真が半ば投げやりに「彼女欲しー」と青春していた時に、「遊んであげよっか?」と挑発的なことをのたまつてきたのが切欠だつた。

だといふのに、姉の出歯龜に顔を赤くした彼女は、自分が処女だということを暴露していた。

勿論その後は、どちらも被害者なのに、ビンタを喰らつて、はい、さよなら。

元凶の姉はこじらとばかりにそのシーンを撮り、"弟の初失恋"という映像ファイルを作ったとか、作つていないとか。

嗚呼、人生つて、どうしてこうも、ままならないんだろう。

* * * * *

走馬灯のように、今までの女難の数々を巡らせていつた少年・和真は、脱走から程なく捕まつた身体を引き摺られつつ、長と呼ばれていた老人の言葉にぼつりと零した。

「だつてえのに、何で俺? 結局、キスすらして来なかつたつとうのに……」

(夢ならとつとと、マジで醒めてくれよ)

ほとんど懇願に近い形で空を仰いだ和真は、見慣れない白い天井に向かい、弱々しい声で吠える。

召喚された自分、その理由を。

「世界を救うために四人の女と交われとか、どこのエロゲーだ！
難易度高過ぎだろ……」

せめてこれが、あの友人だつたら丸く納まつていただろうに。
そう思つと和真は、選ばれなかつた自身の友人に対し、言いがかりに等しい殺意を覚えるのであつた。

全てを夢で片付けようとする和真に対し、逃げ出した彼を捕らえさせた長は、白く長い眉毛をハの字に曲げて困つてみせた。

「いやはや。どうしたものでようか」

（それはこっちの台詞だつ）

のん気とも取れる長の発言に、和真是皿を吊り上げて反論を試みるもの、纏を噛まされていては、声を発したところで意味をなさない。

しかも、縄で椅子にグルグル巻きにされているのだ。

暴れたところで疲れるだけ、という状況だった。

仕方なしに和真是長を睨むだけに留めると、せめて纏だけでも外せと、口をもじもじさせた。

逃走防止のために縄を打たれるのは、腹立たしくとも、理解できる。

だが、声まで封じる必要はないはずだ。

色々つっこみたい、増して怒鳴り散らしたい気持ちはあるものの、ここまでされる筋合いはない。

そんな意味合いを気配にまで漲らせたなら、逡巡数秒、長がちらつと和真の斜め後ろで控える甲冑を見た。

一つ頷いた甲冑は、手甲を嵌めたままで、器用に纏を外していく。

「ぶはつ

「ぶはつ

完全に取れたところで、これ見よがしに大きく息をついた和真是、改めて長を睨みつけた。

「……で？」

普段の自分ならば絶対にやらない尊大な態度でそう言えれば、小さく溜息をついた長がゆっくりと首を振った。

「春告の姫よ、どうぞお怒りをお鎮め下され。姫のお立場も考えず、強引に招いた非、忘れてはおりませぬ。しかし、どうしても我らに

は姫が必要で　」

「御託はいい。んな事より説明しろ。百歩譲つてこいが夢ではなく異世界だとしても、だ。何で四人の女と交わるのが、世界のためになんだよ？」つーか、何でその条件で俺が選ばれた？　しかも姫つて何だよ？」

未だ夢だろと思つ心のまま和真がそう問えば、「夢ではないのですがなあ」とぼやき混じりに、長は答え始めた。

和真が召喚されたこの地を、リジエレイシカという。リジエレイシカは何層かで構成される世界の内、主に人間が暮らしている層を指す。

で、遠い昔、このリジエレイシカで幅を利かせていた人間の王が、増長した人間によくある事をしたそうな。

つまりは、他の層への侵略である。

そして当然の如く、負けた。

層が一つ変われば世界観もガラリと変わるのでから、当たり前と言えば当たり前。

しかも、ただ負けたのではなく、とんでもない呪いまで受けるというオチ付で。

戦を吹っかけた相手の、ほとんど氣まぐれ染みた呪いの内容は、それはそれは恐ろしいものだった。

末代まで祟るのではなく、末代自体を築けなくする

要するに、極少数を除いて、ほとんどの男が生殖機能を失くす、そんな呪いだつたのである。

まあ、生殖機能がなくなつても、性欲は名残のよつに存在しているそうだが。

だから最初、リジェレイシカの人間たちは、あまり深刻に考えなかつた。

それどころか、簡単に快楽を得られると喜んでいる節さえあつた。が、時が経つにつれて、そんな悠長なことを言つていられないことに気づく。

まず顕著になつてきたのが、女たちの冷ややかな反応だつた。

若い内は男たち同様、夫や恋人と無制限に楽しんできた女たち。しかし、女としての年輪を重ねるにつれて、快楽よりも母性を注ぐ相手を求めた彼女たちは、次第に何の成果も挙げられない男を卑下するようになつていく。

呪いが男にしか掛けられていらないのも、女たちの蔑みに拍車を掛けついた。

呪われる前のリジェレイシカでは、子ができる理由を女だけに求めていたため、余計に男への風当たりは強かつた。

かといって、子どもというのは女だけで作れるものでもない。

結果、呪いを免れた極少数の男を巡つて、女たちの熾烈な争いが勃発。

しかもその争いに駆り出されるのは、母性よりも恋愛したい年頃の娘たちなのだから、事態は更に深刻化していく。

ある娘は、将来を誓い合つた恋人との仲を引き裂かれた拳句、女たちに持ち上げられたせいで、でつぱり肥えた中年の妻として贈られ、またある娘は、類稀なる美貌と肢体を持ち合わせていたがゆえに、口直しとして胤ある男の下を巡らされた。

後を絶たない悲劇は、何もその主役を年頃の娘ばかりに求めた訳

ではない。

精力的な青少年、それも相貌・肉体、どちらかでも優れてしまいながら、彼らは決まって昼夜を問わず、女の相手をさせられるのだ。それも恋愛感情を抱くには、あまりにとうの経つた女たちの、自分と（一方的に）愛する人との子が欲しい、という本能のためだけに。

時には投薬までされて、無理矢理性衝動を引き出されながら。

願望・欲望入り乱れての惨状は、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。

男女問わず、老いては若い肉を貪る姿は、そうして生まれる次代の子にまで、蝕まれる未来を約束していた。

そこにはもう、血縁の濃淡もありはしなかった。

あるのはただ、快樂を追い求める人間としての欲求と、絶える事を恐れる生物としての欲求のみ。

どちらの道を選ぶにしても、滅びはすぐそこ、目前まで控えていた。

だがしかし、ここに来て現れた一人の賢者が、呪われた地にある一つの術を受けた。

それが、異世界の血を招く、というものだった。

賢者は言つ。

層を跨いだ呪いは強く、完全には解けないものの、異世界の血で呪いを司る点を貫けば、百年の実りは約束される と。

呪いを司る点とは、層への侵攻を試みた王に乞われ、命じられ、脅され、唆され、二つの層を繋いだ術師の末裔、その女兒四人。

果たして賢者の言葉に従い、招かれた異世界の血である男が、差し出された四人を貫けば、賢者の言つた通り、リジョレイシカに住まう人間の首みは正常に戻ったという。

「これまた賢者の言った通り、百年間だけは。

「そうそう、四人を貰くというのは、一夜で一氣にという事でし
ふえはつー?」

「.....」

嬉々として自分たちの世界の危機を語つた長の顔面へ、和真は器
用に運動靴を当ててみせた。

椅子に縛り付けられている状態では、威力はさほど望めなかつた
ものの、思いも寄らない攻撃をまともに受けた老人は、面白いくら
い大袈裟に引つくり返る。

が、これを終始睨みつけていた和真は笑うことなく、柄の悪い舌
打ちをした。

「ちつ。ただでさえ反吐が出るつてのに、どさくさに紛れて難易度
上げてんじゃねえよ」

「こ、これは異な!」

縁の長衣から干からびた足と異様に白いパンツを覗かせつつ、が
ばっと起き上がった長は、立つ時に使わなかつた杖で床を突くと、
力を込めて言つた。

「無錢で極上の女が抱けるのですぞ!? それも四人も! 内三人
は確実に処女!! もう一人にしても白い結婚だつたと聞き及んで
おりますというのに!..」

「そういう問題じゃ……おい? ちょっと待て? あんた今、一人
は結婚つて」

「ええ、そうですとも! し・ろ・い、結婚ですぞ!..」

「威張り腐るところか、そこ!..」

「ふぐほつ！？」

鼻息も荒く近づいてきた胸を狙い、不安定な姿勢のまま頭突きをかました和真。

長共々倒れそうになるところを、後ろに控えていた甲冑が元に戻しては、べしゃっと床に伏したのは先程同様、縁のジジイだけ。

「あー、ありがとう……？」

（つーか、ジジイは助けなくいいのか？）

一応、助けて貰った手前、疑問に思うところは多々あれど、礼を述べたなら、甲冑が微かに首を振った。

礼には及ばない、これも任務だ、といつたところだらうか。

（にしても「コイツ……なんか可笑しくね？　いや勿論、格好はこれ以上ない変さだが……そうじゃなくて、妙にちぐはぐな感じが）
例えるなら、サイズの合わない着ぐるみを着せられた、貧弱アルバイターのようだ。

（つても、まあ、問題はこっちよりあっちだな）

甲冑からヒクヒク震える長へと視線を切り替えた和真は、頭突きを忘れてついで話しかけていく。

「なあ、おい、じーさん。あなたの考えは大体判ったよ」

（男ならハーレム目指せつつうんだろ？　俺は御免だがな！）

「けどよ？　何だつて既婚者まで引きずり出すんだ？」

（俺の周りの既婚者って言つたら、母親にいとこに、あと担任に？
何にせよ、碌な連中いねえし。軽く叩いたぐらいで体罰だつて騒ぐのに、今時いねえだろ、階段下りる生徒に向かつて、挨拶代わりにドロップキックかます教師なんて）

若干遠い目をする和真に対し、「ぐふつ」と出てもいない血を拭うようにして身を起こした長は、今度はきちんと杖を使つて立つと、ようよろしながら深く息をついた。

「それがですな。実はまだ、先代の春告の姫が役割を終えてから、百年も経つておらず

「じゃあとつと俺を帰せ

「おぐつ！？ な、何故縄が解けて？」

「知りん。」

話の途中で立てた席。

気づかなかつた和真は、指摘されても逃げる事なく、とんでもない告白をし出した長の胸倉を掴んで揺すつた。

異世界からの無茶振り その2

ジジイこと長の話を要約すると、こんな感じである。

和真の前に召喚された異世界の男が、その役目を終えたのは今から七十年ほど前。

ゆえに本来であれば、次の異世界人召喚までには、三十年弱の猶予があった。

だがここで、ある一つの誤算が生じる。
その誤算というのが……

ある意味、人身御供と表すのが相応しい、術者の末裔である四人の容姿が、近年稀に見る優秀さだった、という事。

しかも、その美しさには重複が一切ないのだ。

これは男なら誰でもやりたいはず そう言つたのは、あの威厳たっぷりの王様風のオッサン。

あれで昔はかなりのごによじによつた、という長の話はすつ飛びすとしても、そんなオッサンに逆らう者は誰一人としていなかつた。

いや、最初はいたらしいが、オッサンの説得に渋々応じてしまつたそつな。

何故なら、召喚される男にも好みのタイプがあり、件の七十年前の男が召喚された時の四人は、それはそれは男の好みにかけ離れた容姿をしていたらしく、達成までに三十年近くを費やした、と記録されているらしい。

そしてその三十年の間、またしても若者たちが犠牲になつたそうだからこそ今、この時ならばいける、そう思つての判断だつたといふ。

既婚者が混じっているのも、この中途半端でいい加減な判断のせい。

既婚者や他の四人の女は勿論の事、和真にとつても、非常に迷惑な話である。

しかも、迷惑はこれに留まらない。

長ことジジイがどこぞから託宣という、いかがわしい電波を受信して召喚された和真だが、じゃあ帰せ、といつても、帰すだけの力が残つていならしい。

ただでさえ、百年掛けて召喚のための魔力を蓄えるところを、三十年弱も省略して使つてしまつたせいで、力ある術師は皆、すかんぴんになつてしまつたそうな。

この世界には馬鹿しかいねえのか！？ と、憚ることなく和真が叫んでも致し方ないだろう。

とはいえ、元の世界へ帰るには元々、春告の姫 すなわち和真自身の魔力が必要となる。

無論、魔法とは縁遠い異世界人である和真には、魔力など最初から備わっていないため、この世界で手に入れなければならないのだが、その方法というのが、和真にとつては本末転倒、それどころか更に難易度上がつて、四人全員を孕ませる事だった。

何でも、異世界の男と交わつた四人の最初の子は、必ず純然たる力を持つ精霊になるため、そこから膨大な力という名の祝福が得られるのだそうであるのだ。

女孕ませて、その子どもに祝福させて、自分は元の世界にとんずら……。

エロゲーはエロゲーでも、鬼畜系かよ。

いかに長をボロボロうとも、まだまだ純粋さを失つていない和真が、

突きつけられた現実に声もなく膝を落としたのは言つまでもない。

ちなみに。

先程から散々姫姫言われているが、この世界における姫は、和真の知つている語彙で訳すと巫女などの神職を指すようだ。

彼が交わらねばならないという四人の女も、それぞれが姫 すなわち巫女の名を冠しているという。

姫と同義の巫女。

それは確か、神に仕える現世の穢れとは遠い存在のはずで。

だからこそ余計に和真が打ちひしがれても、仕方がない事なのかもしれない。

* * * * *

話は判つた。

しかし、納得したかと言えば、それはまた別の話。

そもそも和真はまだ、目の前にある生臭ファンタジーを現実として受け入れてはいなかつた。

長に呼ばれて現れた、長よりも腰を曲げた禍々しい感じの老人が、おもむろに学ランの袖を上げて和真の腕へ鋭い刃を押し当てても

「つて、おい！ いきなり何してんだよ！？」

危うく、極々自然に裂かれそうになつた皮膚を庇い、自分の腕を抱いたなら、禍々しい老人が眇めた左目と、瞼を失くしたようにぎょろりとした右目で、和真の方を見つめてきた。

長相手ならば、幾らでもどつき漫才できた和真だが、この老人には言い知れぬ恐怖を覚えた。

少しでも隙を見せたり、ふざけたりしたなら、次の瞬間には胴体から離れた自分の首が転がっている、そんな想像が頭を過ぎる。本当なら逃げ出したいところ。

それでも椅子に座つていられたのは、長とのやり取りの最中、自分を拘束していた縄を知らない内に解いてくれた、甲冑の姿があつたからだ。

一応、和真を助けてくれるらしい甲冑が微動だにしないのだから、このそら恐ろしい老人も、無体な事はできないはず。

いきなり人の肌を裂こうとした相手だつたとしても。

すると、警戒する和真をどう思つたのか、枯れ枝のような手ごと刃を袖へ隠した老人は、しゃがれた声の歪な歯並びにも関わらず、滑舌よく喋り出した。

「そう怯えるな、若人よ。わしはこの国の薬師。うぬがここで暮らすに当たり、その身体を調べるためにここにある。血を採り、うぬの身体が何を受け付け、何を拒むか、知る必要があるのでな。でなければ、ただの食事もうぬにとつては毒となるつ。さて、腕を出すが良い。なに、この刃は微量の血を採るためのもの。当てたところで薄皮一枚の傷もつかん。怯えるな、若人よ」

あまり大きくない声量にも関わらず、染み入るように届いた、不可思議な老人の声。

奇妙にも、信じたい気持ちにさせるそれを受け、和真はおずおずといつた調子で、回収した腕を老人に差し出した。

「……本当、だな？」

「ああ、勿論だとも。姫の御身に傷を残しては、わしが刑に処されてしまうわい。……まあ、それも面白いやもしれぬが

「おいつ！？」

「ひひひ。冗談じやて」

「つたく

全く笑えない冗談を吐いた老人に、つく悪態すら心許なく、近く刃を知り、先にある痛みを察し、和真の顔が顰められた。

押し当てられる刃、その冷たさ。
ひゅっと竦む喉、皮膚の上を滑る一筋の鋭利。

「つづ」

実際痛い訳ではないが、一瞬だけ、皮膚下の肉を裂く感触に声が上がれば、刃文の輪郭をなぞるように朱が滲んでいった。

そうして刃が退けば、老人の言う通り、残された腕には傷一つ見当たらない。

驚いて老人を見たなら、にたあと笑った相手は何も言わず、用は済んだとばかりに部屋を出て行ってしまった。

狐狸の類に化かされた気分で老人の背を追つていたなら、ずすいと視界に割り込んでくる、古めかしい杖。

「春告の姫！ いかに姫といえど、我が妻は渡しませぬぞ！」

「……は？ 妻？」

邪魔な杖を退け、声の主であろう長を惚け気味に見やれば、長い眉毛を吊り上げた長は地団太を踏みそうな勢いで怒り始めた。

「くつ、なんたる屈辱！ いいえ、ワシとて判つてはあるのです！ 彼女の隣に、自分は相応しくない。否！ 彼女の隣には、何人たりとも立てぬと！ いやしかし、それでも、それでもワシはあの人が欲しかった！」

「……ちょい待ち、じーさん。俺の聞き間違いじゃなきや、今、妻つて言つたか？」

（女だったのか、あれ）

一人でハッスルするジジイに、冷静なつっこみを入れるが如く、重要な部分を確認する和真。

しかしジジイは何を思ったのか、恥らつように枯れた身体をくねくねし出した。

「はい、それはもう。正真正銘、ワシの妻ですじゃ。わやつ、言つちやつた！」

「つーことは、やっぱ女だつたんだ……」

気持ち悪いジジイを視界の外にはじき出した和真は、ジジイの妻が去つた扉を再度見つめる。

と、ここでジジイが浮かれた声のまま言つた。

「どうでしたか姫！ 美人だつたでしょ、我が妻は！ 昔もそれはそれは美人でしたが、いやはやどうして、今の方が何倍も麗しい！」

「へー……」

まともに相手するのも馬鹿らしく、和真は気のない返事を返した。が、ある事に気づいては、表情をピシッと固まらせてしまつ。（おーおーおー？ ちょっと待て？ 確かさつき、このじーさん言つてたよな？ 四人の姫は極上の女云々つて。それでこの審美眼つてことはまさか……？）

一夜で女四人と交わる そんな話に乗つた覚えはないものの、これから出くわすであろう件の女たちの姿に思いを巡らせた和真是、言い知れぬ不安に苛まれ、長の妻に恐怖を感じた胸を握り押さえた。

長が美人と評する彼の妻の容姿。

女とは考えもしなかつた相手を例にとり、同じく、長が極上の女と評した、これから会うであろう女たちに恐れを抱いた和真だが、そんな思いも長くは続かなかつた。

何せ、件の女たちと顔合わせするに当たり、身奇麗にする必要があると、和真は放り出されてしまったのだ。

湯殿という、未知の領域に。

脱衣所と思しき場所に押し込まれた和真に対し、控えていたらし
い二人の少女が、恭しく頭を垂れた。

「この度、湯浴みにて姫のお世話を仰せつかつた、アル工と申しま
す」

「同じく、アル工と申します」

「へ？ え、あの……げつ！？」

和真は最初、何の事かさっぱり判らないと、入ってきたばかりの
扉と二人を交互に見比べるもの、二度目に視線を彼女らへ移した
途端、その姿に呻いて大きく一步、後退してしまつた。

年の頃は和真と同じくらいだろうか。

アロマは赤みがかつた茶、アル工は黄みがかつた茶の髪を、頭に
巻いたタオルの中へ隠している。

上がつた頭により判明した瞳はどちらも同じ青で、どちらも似た

ような、それでいて可愛らしい顔立ちをしていた。

たぶん、双子なのだろう。

だがしかし、和真が後退した理由は、そんな生易しいものではなかつた。

二人の着ているシャツと短パンが、明らかに薄手だつたせいだ。

しかも色は全て白。

頑張つて薄田にしてみたところで、衣向ひの色の濃淡は明らかだつた。

和真は一気に沸騰する気分を誤魔化すように、くるり一人へ背を向けると、多少なりとも上擦つた声で叫ぶ。

「な、なんつー格好してんだ、お前らー、服着ろ、服！」

対する双子の反応と言えば。

「服、と申されましても」

「これが私どもの仕事着でござりますが」

「…………」

恐れながら、といふ言葉が付きそうなほど、かしこまつた二人の言葉に、クラクラする頭を抱えながら、和真はゆっくりと振り返る。そうして今度は、遠慮を忘れたようにじろじろ、彼女たちの格好を見やつた。

下から柔らかな丸みが見え隠れするシャツの左右には、ツンと上向く二つの突起。

腰よりも下のラインに添う短パンの紐は、今にも外れそうな蝶々結びを左右に飛ばしている。

そこから伸びる薄手の布の前、礼を取るためなのか、それとも恥じらいゆえか、重ねられた両手はしかし、全てを隠すに至つていない。

(……「ううの、猥褻物陳列罪とか言つんだらうか)

目前に控える少女たちを認めたくない頭が、ふと、そんなどうでもいい感想を述べていく。

と、ここで、和真是一人の手が震えていることに気づいた。

視線を上向かせれば、下唇を軽く噛み、何かに耐えている様子の同じ顔が一つ。

薄つすら上気した頬と潤む瞳が、彼女たちの羞恥を如実に訴えていた。

（これつてつまり、あれつてヤツか）

推測するに、この二人は異世界の男が来るに当たつて、その世話を押し付けられたのだろう。

それも世話相手が姫と呼ばれる身分を考えると、本当ならこんなことをしなくともいい家柄の、いわゆる良家のお嬢様的な存在だったに違いない。

しかもこの反応は、完全に嫁入り前。

（つつても一人、嫁入り前でも平気で似たような事する奴はいたな
……俺はあれを女と認めたくねえが）

親父より中年オヤジな姉。

過去、風呂から上がる際、「パンツ忘れたー」とか何とか言って全裸で登場した奴のせいで、居合わせた父は盛大に酒を噴出していた。

二次被害を受けたのは、遅い夕飯を取つていたために、父の唾液入りの酒を頭から被つた和真とその周辺。

ぼつと浮かんだ嫌な思い出を消し去るよう、和真が溜息をついたなら、前方で佇む二人がビクッと身体を揺らがせた。

いつの間にか落ちていた視線を上げれば、再び唇をきゅっと引き結び、辱めに耐える一つの同じ顔が出迎える。

「……とりあえず、風呂に入れればいいんだろ?」

極力二人から視線を逸らし、呆れたようにそう言えれば、「は、はい」と小さな声が帰ってきた。

これに深呼吸がてら大きく息を吐き出した和真是、すたすた歩き

出しては、慄く一人を素通りし、籠に入つた服らしき白い布を見て振り向いた。

「で、上がつたらコレを着るんだな？」

後ろは後ろでくつきり映る、一つの綺麗な桃の陰影をぼかしつつ、どう着るのかいまいち判らない布を指差せば、ぽかんとした一人が慌てて姿勢を正し、こくこく激しく頷いた。

「は、はい」

「す、すみません、ただいま」

初対面の異世界人、それも男に、誰にも見せたことのない肌を見せる。その恐怖心から役割をすっぽかしてしまっただらう二人が、顔を青くしながら慌てて駆け寄ってきた。

「いや、いい」

すかさずこれに手の平を向け、制止を求めた和真は、顔を逸らした状態で言った。

「なんつーか、その、あんたらの仕事を奪つようで悪いんだが、俺は誰かの手を借りて入浴とか全く慣れてないんだ。だから、そのままで頼む」

「で、ですが」

怒らせたとでも思つているのか、追い縋るような声を死角に聞いた和真は、何とか笑みを見繕つと、なるべく穏やかになるよう努めて続けた。

「けど、使い勝手も違うからさ。判らないところは教えて貰えると助かる」

（だからマジで頼む。それ以上、俺に近づかないでくれ）

常日頃、女の黒い部分だけを見て育つてきた和真だが、女に全く興味がないかといえば、そうでもない。

かといって、こんな訳の判らないところで、自己犠牲精神を全面に出した少女に手を出す、なんて事はしたくなかった。

いや、もつと正直に言おう。

キスの経験もない和真にとつて、処女というのはすこぶる面倒臭い相手だった。

特に、ワンクッシュヨンとなるはずの感情もないのに、「痛い」だの「止めて」だの騒がれた日には……。

熟達の女から手ほどきを受け、全部終わってすつきりして、その後で「へたくそ」とただ一言突きつけられるよりも性質が悪かろう。無論、全ては知識だけの妄想ではあるが。

だからこそ彼女たちに背を向けた和真は、学ランに手を掛けつつ、心の中で小さく愚痴つた。

（くそつ！ 女だけが見られて恥かしいと思うなよ…？ 背中に一人分の視線を受けながら脱がなきやならねえ、こっちの身にもなつてみろ！！ 露出狂じやないつてのに、何でストリップ紛いのことをしなきやならねえんだよ、おい！！ ああくそつ！ いつそ見るんじやねえつて啖呵が切れりや、どれだけマシか）

実際言つたなら、間違いなく小者扱いされる。

たとえ夢だとしても、よく知りもしない相手から、そんなことで変なレッテルを貼られたくなかった。

そんなこんなで全てを脱ぎ終えた和真は、隠すために身を丸めるでもなく、背中を向けた状態で後ろにいる二人へ声を掛けた。

「湯はこっちでいいんだな！？」

少しばかり声が引つくり返つてしまつたが、右手にあるそれらしき扉を指差し、自棄氣味に怒鳴れば、アロマかアルエか判別できない声が「は、はい」と返事をしてきた。

「よし」

偉そうな頷きは、己を鼓舞するために。

短い距離ではあるものの、もしかしたら移動中、一人に見えてしまう可能性があるのだ。

すっかり萎縮している突出部は勿論、がちがちに強張つている顔や、体育会系に縁遠い肉体が。

男性経験があろうとなからうと、男性的な魅力が大いにあるとは

言い難いこの身体に、一人がどんな感想を抱くのか。
考えれば考えるほど恐ろしくてしょうがない。

ゆえに和真は一人を見ずに扉を開くと、襲い来る白い蒸気もなんのその、自ら進んでその中へと入つていった。

和真が入った湯殿は、脱衣所こそ銭湯に近い造りであつたが、肝心の浴槽がある部屋は少々趣が異なつていた。

「まずは身体を洗う、のは良いとしても。どこで洗えばいいんだ、これ？」

薄い布の守りがあつたとはいえ、全裸に近い一人の少女を、扉一枚隔てた向こう側に置いてきた和真は、幾らか落ち着いた頭で首を傾げた。

白い蒸気が視界を隈なく覆う部屋には、それに見合つだけの大きな浴槽がたつ。ぶり湯を張つているのだが、洗い場らしきスペースがどれだけ見渡しても見つからない。

「一応、洗面器っぽいのと椅子みたいのは一組ある……ってことは、この湯を使って洗う、でいいのか？」

床と浴槽の境に風呂道具を認めた和真は、とりあえずそちらへ向かい、風呂桶よりも洗面器に近いそれで湯を汲んでみた。

手を入れれば、少し熱めの温度が感じられた。

何ともなしにそれを床に流してみたなら、一方向に流れていき、その先にある排水溝らしき網の中へ、湯が吸い込まれていった。

「……どういう世界観なんだ、ここ？」

自分の夢ながら判んねー、とぼやきつつ、どうせならシャワーがあれば楽なのに、と思う。

簡素な椅子に視線を移した和真は、おもむろに腰を下ろす、なんてこともなく、つるつるした床の上を滑らせた。

床より低い浴槽内の湯を使うのに、椅子はどうあっても邪魔にしかならないだろう。

（何でこんなもん、常備されてんだろうな？）

疑問は尽きない湯殿だが、ここで身体を洗わなければ、納得しない連中が外にはわんさかいる。

差し当たつては、脱衣所にいる一人だろうか。

「そーいやあいつら、あの格好のまんまのかね？ 城ん中は寒くなかったが、学ラン着てたしな、俺。湯氣がある分、こっち来させた方が良かつたか？」

和真は誰に言つでもなく一人言つると、浴槽前に膝をつき、再び汲んだ湯で首から下を流した。

次いで「いやいやいや」と、浮かんだばかりの自分の案を笑いながら却下した。

「良くない良くない。たとえ寒かるうが、こっちに来たら、水蒸気ですぐに口に感じになっちゃつて。それに、本当に寒いなら何か着るだろ。ああでも、着るもんなかつたら寒いかもなー。かといって、こつち来いつつーのもなー。完全に勘違いさせちまう」そうだし

温まる身体に少なからず罪悪感を抱きながら、やれやれと首を振る。

傍りでうつかり想像してしまった、双子の「口を感じ」も、苦悩とともに払うつもりで。すると

「お優しいのですね」

背後から届く、静かな聲音。

しかし、これを想像したがゆえの幻聴と捉えた和真は、「いやいやいや」と手を振つてなかつた事にし、はつと気づいては濡らしていない頭を搔いた。

「そーいや、シャンプーとか、どこにあるんだらうな？ もしくは石鹼……しゃーねー、あの一人に聞いてみつか

湯を掛ける手を止めたところで、絶えず起ころる蒸氣は和真の身体を冷やさない。

このため、洗面器を局部に被せた和真は、立ち上がりつつ背後を

向へとい、一步前に出まつと。

むひつ。

「きやつ」

「え？」

眼前が蒸氣とは違ひ白に覆われ、両頬に滑らかな柔らかさを感じた。

しかしてそれも、束の間の事。

「きやあつ！？」

「おおつ！？」

突然の接触に踏み出していた和真の足が動転し、着地を誤つてあらぬ方向へ着けば、同じく動転していた身体がぐらついた姿勢のまま、前方へと倒れていぐ。

「アロマ！」

手から離れ落ちた洗面器の音が、甲高い叫びと共に広い湯殿に響いた。

と同時に、身体が一瞬だけ静止したものの、倒れる事に変わりはない。

「くふつ」

どささつ、ともつれ落ちる音に続き、和真の頭が柔らかな白の上でバウンスしたなら、頭上から苦しそうな声がやつて來た。

だが、和真にはそれが何なのか、確かめる余裕がなかった。

それと言つのも、湯殿には自分しかいないはずで、似た声質を持つ双子の少女は脱衣所にいるはずで、こんな感じで自分と共に転ぶはずはないのだ。

しかも、事もあらうに和真の頭を、胸らしき箇所に押し付けた形で。

(……おこおい、[冗談はよしてくれ？])

思いつつ、起き上がりついでに左頬をくすぐる部位へ、手を押し

当てる。

「あつ」

途端、返つてくる感触は張りのある柔らかさながらも、手の平の中心に硬い存在を主張しており、僅かならがらに上がった声の先を見やれば、潤んだ青の瞳が見つめ返してきた。

纏め上げられた赤みがかつた茶髪は、確か

「あ、アロマ、だつけ？ な、何してんの、お前……？」

（いや、この場合の何してんのは俺か？）

「わ、悪いっ！」

目の前にいる人物が信じられず、しかし確かな感触に混乱した和真は、大急ぎで身を起こすと、甘い余韻にほどされそうな分身を庇い、尻を使って後退した。

視界を広くしてみれば、和真に触れられた右胸を庇いつつ、身を起こすアロマを、後ろからアルエが心配そうに支える図がある。位置関係から推察すると、先程一瞬だけ静止したのは、アルエがアロマを助けようとしての事だったらしい。

麗しい姉妹愛。

しかし視点を変えれば、湯気に張り付く薄布一枚で絡む二人の、えもいわれぬ妖しい様。

和真は双子の美少女の間に漂つ、一種異様な雰囲気に生睡をぐぐり呑みこむと、正座をして局所を伏せさせ、間に合わない部分を両手で隠しながら上擦つた声を上げた。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫か、ですつて？」

と、ここでアロマを支えていたアルエが、鋭い視線を和真に向かつて投げてきた。

「安否確認をするくらいなら、こちから来て、アロマへ手を貸すのが普通ではありますんことー？」

（げげっ）

かしこまつた態度はどうへやら、距離を置いた和真へ食つて掛か

つてくるアルエ。

「あ、アルエ、私は大事ありませんから」

和真が引いたのを知つてだらう、胸を押さえていた手で、自分の身体を支えるアルエの肩に触れたアロマは、「ですが」となおも苛立つ双子の片割れへ、ゆつくりと首を振つてみせた。

これへ一瞬、悔しそうな顔をしたアルエは、首を振つて何かを断ち切ると、複雑な表情を浮かべつつ和真へ頭を下げた。

「申し訳ございません。出過ぎた事を申しました」

「い、いや。あんたの言つ通りだ。俺も悪いとは思つてゐるんだ。ただ……」

「ただ？」

煮え切らない和真の言葉に、顔を上げたアルエが眉を顰めてくる。訝しげなその視線から逃げるように、そそくさと背を向けた和真是、肩を小さく丸めて「ぐつ」と呻いた。

（い、言える訳ねえだろ！ ただでさえ、蒸氣で口ひ事になつてゐるつてのに、あんたがいきり立つたせいで、アロマの立てていた膝が若干崩れて、色々丸見えになつてゐるぞ、なんて！ それで近づけないなんて、言える訳が……）

「あの？」

（ひいつ！？）

べたりと背中に置かれた手。

恐怖映画の登場人物さながら、ぎこちない動きで和真が振り向けば、透け透けの服に気づいていない自然な顔つきで、アルエが気遣わしげにこちらを見つめていた。

「もしかして、どこかお加減が？」

「…………！」

大人寄りの身体つきに、あどけなさの残る相貌。

背徳的な香りが匂い立つ場面に、ぶんぶんと音が出そうなほど首だけ振れば、困惑したアルエが「あら？」と小さく声を上げた。

「どうしました、アルエ？」

「それがどうも、お怪我をされてこるようだ
(け、怪我？ 怪我なんて俺は別にどうせ……)

別の意味で痛くなったりあるといひはあれど、転んだ時にさえ傷はつかなかつた。

アロマとこづくッショングがあつたお陰で。

「うひ

(く、くそつ！ 静まれ、この愚息！)

危機的状況下、うつかり思い出してしまつた柔らかさに、とある部分が硬さを覚えていけば、暴れ馬にしてなるものかと、封じ込める手にも力が入る。

せめて後ろの一人がいなくなつてくれれば そう思い、口を開くうとするが。

「は、ぐつ

出てきたのは切羽詰つた唸りだけ。

魅惑的な双子の美少女の存在もわかる」とながら、心地良い蒸氣の温もりが、落ち着くうとする和真の努力を無駄にしているせいだった。

(や、べつ、も、限界……！)

和真にとつて何が不幸かと言えば、それは勿論、双子の美少女がそこにいたこと。

そして、彼女たちにとつて何が不幸かと言えば、それは勿論

「姫？ どうされたのですか、姫？」

「姫、何が あつ！？」

和真の身に何が起きているのか、知識としてあっても実際にはした事のない双子は、彼が必死に隠そうとしていたモノを怪我と勘違ひして暴いた瞬間、その洗礼を受けてしまつのであった。

ぱしゃぱしゃと軽い音を立て、一つしかない洗面器で顔を洗う少女が一人。

「うえええええ、最悪うー……洗つても洗つても、何か気持ち悪いい」

「駄目よ、アルエ。姫の前でそんな事言つては。姫もそういうつもりだつたわけではないのですから」

「うう……アロマには判りませんわ、私のこの気持ち。飛沫が少しき服についた程度なのですから。それに引き換え私は顔ですよ、顔！もう、信じられません！」

「それも仕方ない事でしょ？ 何せアルエと来たら、姫が隠しているところを無理矢理引き剥がして」

「怪我をされていると思つたんですもの！ ですから、早く手当でをと思って。それなのにそれなのに、ふきゅつ……こ、これでは、お嫁に行けませんわ！」

水の滴る顔を両手で覆い、アルエが泣き言を喚けば、優しく伸びたアロマの手がその頭を撫でていく。

「安心なさい、アルエ。私たちはもう、お嫁に行く必要などありはしないのですから」

「ふうっ？ お、お嫁に行きませんの？」

「ええ。というか貴方、お父様のお話をきちんと聞いていなかつたの？ 姫にお仕えするに当たっては、姫が私たちを棄てない限り、私たちは姫の所有物、すなわち姫のお嫁さんみたいなものなのですよ？」

「姫の？……って、つまつはこの方の？」

「ええ、この御方の。だから姫の「」要望とあらば、先程のよつた事も喜んでしなければなりません」

「喜んで……ご奉仕、ですの？」

「ええ。一緒に頑張りましょう、アルエ」

「……アロマも一緒に、私も頑張つてみます」

そつと伸ばされるアロマの手に、絡み合つアルエの手。

双子の間でそつくりの笑顔が交わされれば、和やかな雰囲気が蒸氣の中に溶け込んでいく。

* * * * *

45

和真はそんな双子の様子を、仰向けの放心状態で眺めていた。

暴かれた瞬間、抑え切れなかつた猛りをアルエの顔面といつ、順序もへつたれもない場所へぶつけた分身は、軽く開いた股の上でしょぼくれている。

アルエの洗顔のために使われた洗面器が、少し前まで洗つてもいない、数回流しただけの其処を覆つていた　　と伝える口もない和真。

腕を使い、中途半端に起きた彼は、股を越えた先にいる双子へ、段々と疑問を抱き始めていく。

全裸の男、それも双子の片方へとんでもない粗相を働いた一物付が、近くで倒れているというのに、逃げるでもなく妙な慰めで姉妹愛を深める少女が二人。

しかも湯の蒸気を多分に吸つたせいで、どちらもほぼ全裸状態になつてゐるにも関わらず、だ。

どう考へても異常だらう。

（なあ、おい？ これは夢、だよな？ いや、夢じゃなけりや可笑しいだろ？）

奇妙な光景を田の当たりにし、放心状態だった和真の田に、徐々に光が取り戻されていく。

かといって、それが正気の色をしているとは限らない。

（そうだ、そう。夢に違いない。普通だつたらこには、何すんのよ！？ とか何とか叫んで、洗面器か椅子で俺の股間を再起不能になるまで痛めつける場面だろ？ 僕にその気がなくても、原因がそつちにあつても、アイツらはいつだって話を聞きやしないんだ……）

思えば、光の速さを髣髴とさせるスピードで流れしていく、和真の女難のエトセトラ。

ふつふつと、当時は完全に押さえ込まれていた、腹の底から沸き上がつてくる怒りを感じたなら、（そうだ！）と和真は思った。

（大体、今回の事だつて、全部お前らのせいだろ？ 僕は来るなつたよな！？ それなのにここへ来て、かと思えば人の進行邪魔しゃがつて。その拳句、自分たちの破廉恥な格好差し置いて、勝手に被害者面するとは何事だ！？）

再燃した怒りというのは、なかなかどうじて、当時の怒りよりも収まりにくいものがある。

その典型を示すように勢いよく立ち上がつた和真は、足元で向かい合い、驚いた田でこちらを見つめる双子へ、びしっと指を突きつけた。

ただし、指の先は脱衣所へと続く扉の方向。

「……とつとと、出て行け」

怒鳴り散らしたい思いを押し殺したような低い声が、和真の口をついて出る。

かーぜもないのにぶーらぶら、は今更隠したところで意味もないため、もう一方の手は堂々と、ひょろひょろした腰に当たられていた。

気分は犬に命令する飼い主である。

しかし当たり前の事ながら、双子は犬でもなく、和真にしても彼女らの飼い主になつた憶えはない。

「出て行け、と申されましても」

「私たち、姫のお世話を仰せつかつておりますし
手を合わせ、頬を付き合わせて、きょとんとした顔をする一人。
密着度の高さに互いの胸を僅かに潰し合つても、彼女たちは和真
の足元から、彼の様子を伺うばかり。

「つ！」

どこまで行つても目の保養 ではなく、目に毒な光景を前に、
元気を取り戻しそうな部位を感じた和真。

慌てて隠そうとしても、手から其処までの距離は遠く、異変に気づいた双子が凝視し出しては、中途半端な格好で止まつてしまつた。

「あら」

「きやあつ」

興味津々に眺めるアロマに対し、また掛けられては堪らないとばかりに、両手で顔を覆うアルエ。

しかし指の隙間から、やはりアロマと同じように見つめる青い瞳があつたなら、寄つてたかって視姦される側に回つてしまつた和真是、途端に勢いをなくしてしまつた。

隠そようと頑張る自分に対し、裸体を惜しげもなく晒す双子に、何だか負けた気分を味わつたのが、主な原因だ。

「あら……」

「まあ……」

和真のそんな落ち込み具合を写し取つたのか、力を失くしたソレに、双子が残念そつた声を上げた。

「…………」

「…………」

「…………」

和真自身も沈黙すれば、同じく双子も沈黙を返してくる。

白い蒸気が覆う湯殿で、全裸の少年とほぼ全裸の双子の少女が、高低差をものともせず、互いをじっと見詰め合つ事、しばらぐ。

おもむろに動き始めたのは少女たちの方。

一人が椅子を持つと、もう一人が洗面器に湯を汲み始める。

「姫、こちらへどうぞ」

そう言つたのは、和真の背後に椅子を置いたアルエ。

緊張の取れない肩にほつそりとした手を添え、椅子に座るよう誘導した彼女は、蒸氣で濡れた和真の頭に胸を乗せると、肩に添えていた両手を伸ばし、目の前で擦り始めていく。

「姫は異世界の方ですので、ご存知なかつたかもしませんが、身体を洗うにはこのように手を擦るだけで、ほら」

しつとり輝く手が擦られる度、生まれてくるきめの細かい白い泡。「この泡は蒸氣が元になつておりますの。ですが、蒸氣を浴びるだけでは泡は立ちませんし、身体を洗つた事にはなりません。このように、摩擦を加えなくては……」

「ふあつ！？」

離れたかと思ひきや、背中を滑り始めるアルエの肢体。

上下の動きに合わせて、アルエの説明通り、泡が背中に生じていくのが判る

ものの。

「い、いきなり何してんだ、おま」「

「ああ、姫、駄目ですわ、動いては。」こちらをお向こなつて？」

「ふざけるのもたいが　おぶつ！？」

身を捩つてアルエを遠ざけようとすれば、半ば強引に戻された顔が、憶えのある柔らかさに包まれてしまつ。

その間にも、背中に寄り添うアルエの動きは止まらず、回された彼女の手が和真の前面を、我が物顔で擦つていいくのが、暗闇の

中で感じられた。

「~~~~~！！」

迷いを吹つ切つたかのよう、それでいて纖細な動きで、和真の肌を伝う指先。

と思えば、頭の中に同じ指が差し込まれていった。

闇の中で次々行われていく動作に、兎に角、視力を取り戻さなければならぬと考へた和真は、顔面を覆う柔らかさを引っ張がすべく、弾力のあるソレを両手で掴んだ。

途端、「きやつ」と短い悲鳴が上がり、強要された闇が弾んだもの、変化はそれだけ。

試しに手中のものを揉んでも、知識だけを頼りに尖った周辺を親指で擦つても、視界の改善には至らず。

「あんっ……姫、お願ひですから、じつとしていて下さいませ。でないと目に泡が入つてしましますわ。お戯れなら湯に浸かりながらにして下さい」

それどころか、和真の頭をきゅっと抱き寄せた闇 胸の谷間に和真の顔を捕らえたアロマは、喘ぎに似た声でそんなことを言つてくる始末。

（目に泡！？ シャンプーハットのつもりなのかよ、この格好！？ つーか、湯に浸かりながらならいってなんだ！？）

自分でやつておきながら、正氣の沙汰とは思えないアロマの言動の数々に、和真は言い知れぬ恐怖を抱いた。

そして抱きついでに、胸から腰、尻の側面へと手を下ろしては、その肉感を直に確かめるように、べつたり張り付いた守りの下から、手の平を差し込んでいった。

一度目の忠告を無視した暴挙を、許すはずもないと考へて。しかし。

「ひ、姫……判りました。姫のお好きな様にななつて下さいませ。ただ、お顔はこのままでお願ひしますね？」
何故か許された。

それも、困った子、と嘆息せながら頭を搔く。ううんが、

全裸で椅子に腰掛ける和真の前には、シャンプーハット代わりの胸にその顔を埋めさせ、髪を洗うアロマ。

後ろには、和真の背中を身体を使って流しつつ、回した手で和真の前面を丁寧に洗つっていくアルエ。

そんな刺激的な格好で、双子の美少女に前後から洗われ、ついでに両手をアロマの尻に差し入れている和真は、さぞかしらしのない顔を彼女の胸の中でしているかと言えば……それでもなかつた。いや、それどころか逆に、顔色を真つ青にさせていくくらいだった。

（なんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれなんだこれつっ　！？）

なんだこれ以外の言語を忘れたで、ぐるぐるその言葉だけが、和真の頭の中を渦巻いていく。

現実にこんなことが許されるはずもない。

ならばこれはやはり夢？

だがしかし、それを肯定するには乗り越えなければならない壁がある事に、今になつて和真は思い当たつてしまつた。

何せ彼は、夢の中ですら、こんな願望を抱けるほど、女に希望を持つた人生を送つた憶えはないのである。

和真が生きてきた十七年という月日は、その大半を女難に食いつぶされていた。

そして残りの成分は、少しの友情を除き、女難の副産物として現れる、女の熟成された濃厚な黒い部分で占められている。

一夜で四人の女を、の部分は、どこかで聞きかじったかもしれない

「Hロゲーのイントロから来ている、そつ解釈する」とも可能だろう。

だが、双子に挟まれるこの状況は、どう足搔いても和真の夢になるはずがなかつた！

悪夢、なら十分在り得るが。

（し、死んで堪るか！）

甘い夢と評しても過言ではない湯浴みの場面を、案として浮かんだ瞬間に、悪夢終わりで現実死にオチと断定した和真。時を同じくして、アルエの手が優しく包み始めるのを感じたなら、大切な息子を守るべく、和真は勢い良く立ち上がつた。

「きやつ、ひ、姫？」

「つきやあつ！？」

闇から脱せば、自然と引き寄せる形になつたアロマとは違い、しなだれる先を失つたアルエの身体が、椅子を腹に抱え込むようにして倒れ、咄嗟に和真の腿を掴んできた。

「あ、あの……」

密着する和真の身体に、尻を掴まれたままのアロマはドギマギし。「は、は、はあ……お、驚いてしまいましたわ。もつ、姫つたら、いきなり何を ひつ」

和真の腿を掴むことで、顔面強打を免れたはずのアルエは、そこが誰の股の下とも考へず顔を上げたせいで、ペチヨつ、と別のモノに額を叩かれてしまつた。

「姫……」

「い、や

赤くなるアロマと青くなるアルエ、そんな二人を前と下にした和真は

「ふつ……ふふふふふふふふふふふふ。ふじゅんいせこにうみうつ、はんた

— こつこつ —

ぶつ壊れた。

ぶつ壊れてしまつた。

今もつて現実とは認められない、かといつて夢といつて訳にもいかない、死にオチが待つてゐるであらう悪夢を前にして。

不純異性交遊真つ只中の己を全否定した和真は、宣言と同時に、アロマの尻に置いていた手を上へ移動させると、薄い布の要である紐を力任せに引き千切つた。

「きやあつ！？」「

見た目は全裸でも、薄い布の感触に安心を見出していたのだろう。下半身が涼しくなつたことで取り乱したアロマは、それまで隠すのを忘れていた前に両手を押し当てる、和真から大きく一步退いた。

その間にもキレた和真の行動は続き、上半身を後ろに向けた彼は、頭を股に潜り込ませたアルエの、背中に張り付いた布を下から掴むと、一気に引つ張り裂いていく。

「やあつ！？」「

「ひからもアロマ同様、涼しくなつた胸を押さえた姿で股の下から脱すると、尻餅をつくよつにして、和真から離れていつた。

「ふうつ、ふうつ、ふうつ……フー フー フー フー フー

「ひ、姫 痛つ！？」「

「アルエ！？ 姫、お止め下さい くうつ！？」「

荒く息をついた和真は、慄くアルエの髪をタオルごと驚掴んで強引に立たせると、暴拳を止めるよつ求めたアロマを小脇に抱え、遠い胸を抉るように掴んだ。

「い、たつ……やつ、抜けちやうつ」「

「ひ、め、お願……いた、痛い……うつ」「

頭皮ごと剥がれそうな痛みに、胸を庇つことも忘れて、アルエが目の端に涙を浮かべる。

撫でられることにすらまだ慣れていない片胸が歪む痛みに、下半身を曝け出したアロマが苦悶を浮かべる。

しかし和真は一人の様子を一瞥することなく、脱衣所までの道のりを、壊れた薄笑いを貼り付けて歩いていった。

それぞれに逃れられない痛みを抱えた双子が、どれだけ泣き叫び訴ても、和真の歩調は淡々と進み。

「ひあつ」

「あぐつ」

和真が彼女たちを投げるよつに解放したのは、脱衣所の扉を足で開いてから。

ぞんざいに扱われた双子が、受身も取れずに床へ叩きつけられるのを見届けた和真は、その顔が上がる前にぴしゃんっと脱衣所の扉を閉めた。

くるり背を向けては、扉に寄りかかってクツクツと肩を揺らす。「くつ、くくくくくくく……はあーはつはつはつはつ……どおだ、ざまあ見ろ！ 僕は惑わされないぞ！ 女なんかに、女なんかに女なんかに女なんかにつつ！ 誰がつつつ ああ？」

不意にがくつと落ちる膝。

訳も判らず下を向けば、視界の動きを追つよつて、じすんと床についた尻。

と思えば震んでいく田の前、くらぐらする頭が左右にぶれる。

「うつ……くそつ。奴らは追い出したつてのに、何で……」

次第に荒くなつていく息に耐え切れず、そのまま倒れてしまえば、折角閉めた扉が開く音。

誰かが遠く「姫つ！？」と叫ぶ声を耳にする。

「死ぬ、のか？ 夢、なのに……イイ田、ふににして、追つ払つた、つてのに……」

女に希望を持つ事はなくとも、双子の感触は非常に気持ち良かつた。

閉ざされるる瞼の間に、甘い温もりを思い出せば、後悔だけが朦朧とする意識に宿つていく。

（あーくや。どうせ死ぬんなら、アイツらにモツと好きにさせとくんだった……。）

和真は力任せに双子を引き摺った手を、どことも知れない場所へ伸ばすと、唐突に氣を失つてしまつた。

と思つたのも束の間。

（……ん？ あれ？ 僕、生きてる？ つーか、何か左手が柔らかい）

意識が浮上してきた和真は、瞼を閉ざしたまま、何かを軽く掴んだ左手の指をやわやわと動かしていく。

「ひゃんつ。あ、アロマ、姫が、お氣を、取り戻されたようですわ。んんつ」

すると瞼に向ひついで、何かに悶えるアル工の声が聞こえてきた。

「……見れば判りますわ」

続いてどこか不機嫌なアロマの声も。

（アロマにアル工……つてことは、これはまだ夢、いや、悪夢の中？）

思いつつ、手に馴染む丸みの輪郭を擦れば、上擦つた甲高い声が何度も上がつた。

その内に見つけた突起を持ち無沙汰に弄くれば、「やつ、そんなつ」という喘ぎが聞こえてくる。

と、身体と平行になっていた右手が、ゆっくりと持ち上げられていった。

頭の斜め上で動きが止まつたなり、甲に擦り寄つてくる似たような丸み。

「酷いですわ、姫。先程は散々触れて下さつたのに、私には痛みだけ残してアル工ばかり」

「し、仕方ありませんわ、アロマ、あ。何せ姫は、無意識で、掴まれている、のですもの」

「判っています！ 判つてはいますけど……意識が回復されたのでしたら、少しくらい、私に触れて下さつても」

（何言つてんだコイツら？ 姫つてのは俺だよな？ 触れるつて何を）

和真が不思議がれば、痺れを切らした様子のアロマと思しき両腕が、右手の甲を更に丸みへ押し付けていく。

その方向と双子の会話内容、そして今なお弄り続いている左手の感触と、連動するアル工の體。

（まさか……？）

嫌な予感に和真はゆっくりと、瞼を開けていった。

光の眩しさに顔を顰めつつ、どこかへ向かつて伸びる左腕の先を追えば、

「姫、お田覚めですか？」

それはほんのり頬を染めて迎えるアル工の、初めて見るブラウス姿の中に。

「う、わ、悪い！」

慌てて引き寄せ引っ込んだなら、和やかだったアル工の顔に不機嫌が宿り、代わりにアロマの声が楽しそうに変わつていった。

「そのような顔をしてはいけませんわ、アル工。姫、お水をビュ～

「あ、ああ、悪い……」

後ろからやつて来た水差しが、直で口に挿入される。

カルキ臭のない滑らかな舌触りに、喉を鳴らして飲めば、カラに

なる前に水差しが引き抜かれていく。

間の悪いその動きにより、和真の口の端から水が零れれば、またしても後ろから伸びた纖細な指が、滴る流れを絡め取った。

「姫？ お加減はいかがでしょう？」

離れる指とアロマの声を追い、顔を上向きにさせた和真は、拭つたばかりの指の雫へこれ見よがしにうつとり口付ける彼女の、やたらと扇情的な顔に遭遇。

「な……にをしてるんだ、お前？」

ついでに自分の右手がアロマの胸に埋められているのを発見すると、頬を引き攣らせて問いかけた。

と同時に、今現在、自分の頭がアロマの膝 というか身体を枕にしていると知つたなら、焦る勢いに任せて上半身を起き上がらせた。

が、しかし。

「くあつ んぶつ」

横になっている時は感じなかつた鈍痛が和真を襲い、バランスを崩した身体は前にいたアル工の胸に着地。

「やんつ、姫。いけませんわ。のぼせているのですから、しばらくじつといませんと」

（のぼせ……ああそつか。俺、死んだんじゃなくて、のぼせたのか）和真は段々と飲み込めてきた状況に、億劫な頭をアル工の胸に預けながら嘆息した。

露出派？ 着衣派？

服越しに香るアルエの体臭に、えもいわれぬ心地良さを感じて目を細めた和真は、自分の身体にも学ランではない服の質感があることを知った。

（置いてあつた服か。つてことは、身体の泡を落とした後で、着せられたんだろうな。元々見られてはいたが……なんか恥）まるで赤ん坊ではないか。

そんな自分を隠すように、更にアルエの谷間へ顔を押し付けると、

乾きかけの頭がそつと撫でられていく。

目だけを上にやれば、同じ年ぐらいの姿に母性を宿した瞳が、和真のことを優しく見つめていた。

タオルから解放された黄みがかつた茶髪が、柔らかな波を描いて流れていれば、なおさら。。。

（母性……って、そっちにもあんまり、いい思い出はないんだが）脳裏に過ぎる一家の大黒柱を日々揺さぶる、一家の鬼将軍の姿。

一応、それなりに子として守られてきた記憶はあるものの、その守り方たるや、小熊を守る母熊の気性そのもの。

守られているはずなのに、自分がうつかりで始末されそうな気配がひしひし漂つっていた。

とはいって、アルエにあるのは優しさだけに見えたため、知らず知らず調子に乗ってきた和真は、倒れた拍子についた左手で、彼女の胸を僅かに揉んだ。

するとアルエは少しだけ目を見張り、瞳を潤ませては微笑みを深めていく。

だがそれは、母性に留まらない艶めきをアルエにもたらすもの。それに惑わされる形で喉を鳴らした和真は、肌蹴たままのブラウスから覗く、白い曲線を目に留めると、果実を貪るように口を開い

て食もうと。

「姫ー」

「つおつー？」

背後からの怒声に驚いた和真が動きを止めたなら、アロマがブラウスを脱ぎ脱ぎ、肩紐のない、レオタードを髪髪とさせる下着のラップを、上からぺろんと捲つて見せ付けてきた。

左右の内、手跡のついた左側の胸を堂々と揃えた手で示しながら。「触るのでしたらまず、私からにして下わいませー」アロマばかりそんな、優しくなんて酷いですわ！」

「なつ、いきなり何言つてんだ、お前……？」

正氣とは思えない訴えを受け、アルエに後頭部を預ける格好でアロマに向き直つた和真は、赤みがかつた茶髪の毛先で見え隠れする淡い先端をチラ見しつつ、涙目になつている青い瞳へ眉根を寄せた。のぼせが取れないせいで、男の本能に準じてしまつ和真に対し、アロマが四つん這いで迫つてくる。

和真の胸で交差する、アルエの腕の前まで覆い被さつたアロマは、ぐつと顔を近づけると、今にもキスしてしまいそうな距離で言った。「お願いします、姫。湯浴みのお世話が終わつてしまつた今、次に姫にお会いできるのは、明日の湯浴みの時。……それなのに私の胸にあるのは、姫に慈しんで頂いた高鳴りではなく、錯乱した手に乱暴された痛みだけなのです。ですからどうか、もう一度、私に触れて、愛して下さいませ」

「あ、愛？」

思わぬ単語に、和真の目がぎょっと剥かれてしまつ。

錯乱していた事については弁明の余地もないが、だからといつて、それ以前に触つてしまつたのは、単なる事故（故意含む）であつて愛からではない。

だが。

「姫……私にも、どうかお情けを」

「お、お情けって……どう考へても可笑しいだら、それ。普通、男で断る奴なんていねえし」

ぱおり、本音が和真の口から零れたなら、ぱっと顔を明るくさせたアロマが「では！」と、期待に満ち満ちた目を向けてきた。

何がそんなに嬉しいのか、和真にはさっぱり理解できないもの、普通は無条件で触れないところを、望まれて触れるのは、色々とおいしい気がした。

（はじめて……どうすりゃいいんだ？ わきみたいこしたらいののか？）

迷いながらも下向きになつて、アロマの胸へ、手を伸ばしてみる和真。

しかし、アルHの胸を直に触っていたはずの左手ともども、腕が異様に重くなつて、眉毛が怪訝に顰められていく。「あ、れ？ 腕が、なんかすげー、重くなつてんだけど」「するとこれをどう受け取つたのか、一瞬表情を曇らせたアロマ、続けざまに不敵な笑みを浮かべてきた。

「！」

女難の経験がそうさせたのだろう。

途端に、どうとは言わないが、きゅっと縮む思いを抱いた和真は、アロマから遠ざかるように足を掻いていく。

「ひやつ、姫、くすぐつたいですわ」

しかし、どれだけ後ろに進もうとしても、アルHの胸に頭が埋まるだけ。

乗じてアロマの笑みが黒みを帯びたものになつていけば、ブラウスの中で胸を肌蹴させた姿も、別のものに見えてきた。

たとえば、そう、神話等によくある、上半身は女の身体、下半身はヤバげな感じの

「姫……」

「な、何だ！？」

想像を逞しくしてしまったのが間違いか、静かに呼ばれただけでビクついた和真から、引っくり返った返事が出てきた。

今にも涙ぐみそうなそれへ、アロマは少しだけ怪訝な顔をしたものの、再度微笑むと、境界線だと思われたアルエの腕をあっさり越えて、自身の胸を惜しげもなく和真の前に突きつけた。

「腕が動かないのでしたら、姫のお口で

「……は

（はい……？）

幻聴か？ それともそれに近い何かか？

今しごと耳にした言葉が信じられず、正気を疑うような目でアロマを見上げれば、まろやかな房の間に嫣然とした表情を浮かべた彼女は、ほんのり頬を染めて言つた。

「姫のお口で私を慰めて下さいませ」

（ちょっと、おまつ！？ そ、それって女が言って良い台詞か？）

経験なし、発想のレパートリーにしても少ない和真だが、アロマの台詞は確実に別の場面を連想させてきた。

側仕えの騎士に褒美を強請られ、下が駄目なら上で、と譲歩されて本気で悩む、真面目と馬鹿が紙一重の姫君もしくは。

邪悪な魔法使いに攫われ、散々嬲られた拳句、これが出来たら解放する、という絶対嘘だろお前的な提案にすがる姫君みたいな。

（つて、どっちも姫の立場ないだろ、それ！ くそつ、何で巫女じやなくて、姫つて事になつてんだよ、俺！ 巫女だったらまだ……つて、全然変わんねえし！ つーか、逆にヤベエ！…）

一度暴走を始めた思考は、ちょっとした単語に反応して、先程とは別の場面を和真に連想させる。

ベースは先程と大して変わらないものの、対峙する相手が人型以

外の異形ばかりとは何事か。

(しかも巫女装束とか、和服は駄目だ！ ツボ過ぎるー。)

女が苦手なのであって、決して嫌いではない和真、実は和服女性にグッとくるタイプであった。

洋服姿の女に絶望し続けた反動で、古き良き時代の大和撫子に、多大な幻想を抱き過ぎた結果だ。

そしてその結果は今、最悪の形で現れてしまう。

「……あら？」

最初にソレに気づいたのは、和真の唇に胸を近づけようとして、更に身体の距離を縮めてきたアロマ。

アルエの両腿に手を置いていた彼女は、少しだけ身を起こすと、探る視線を和真の身体に這わせて下降させていく。

と。

「あ……ふふ」

何かに目を留めでは、嬉しそうな顔を上げ、再び和真の顔へ裸の胸を近接させてきた。

それと同時に、意識したと思しき動きでくゆる腰が、アロマの察知した異変を和真に突いて知らせてくる。

（げつ、マジかよ。さっきまでは確かにきゅってなってたろ？ 妄想でこれって……）

迫られる状況と、柔らかく大きめな衣服が、ソレに対する和真自身の察知を遅らせていたようだ。

挑発的な動きをしていても、口に出すことは憚られるらしく、薄つすら羞恥に頬を染めたアロマが、黒い部分のない、可愛らしい笑顔をした。

理解に苦しむところではあるが、どうやら一向に触ってくれない和真が、それでも自分に反応していると感じ、喜んでいるらしい。

そんなじらじらアロマを前にして、不意に和真の心臓がドキッ

と高鳴った。

（け、けどよ、コイツの動作、可笑しくね？ 初対面の時は羞恥の塊みたいだつたくせして……ああでも、夢なら何でもありか）

後ろのアルエにしてみても、つっこみどころは多々あるが、全て夢で片付ければ納得がいく。

でなければ、この状況、この体勢は色々と無理があるだろう。とはいえる。

初対面から過ごしてきた時間は、決して長くはないのに、ここまで鮮やかな表情をしてくれるアロマ。

そして、浴場での扱いを忘れたように、今も和真を後ろから支え抱き続いているアルエ。

逃避しかけた田の前の課題を見つめ直した和真は、緊張に粘つく喉をじくっと鳴らした。

（今までの俺の経験からいつ つつつても、こんな状況は皆無だつたが、とりあえずこれは罷だ。後ろの感触が許されるのも、田の前の膨らみが曝け出されているのも、俺が触るまで。触れた途端に変態呼ばわりされて、一人がかりでのぼせた身体をボコられるのは確実だ。確実なんだ。絶対なんだよ！ いやしかし）

和真の目が見つめるのは、自分の手形がついたままの、痛々しいアロマの左胸。

（……どの道、ボコられても仕方ないことじてんだよな、俺。だつたらいつそ、罵に掛かってもいいか。どうせこれは、とびつきりの悪夢なんだから）

思うが早いが、唇を近づければ、「あっ」とアロマの声が小さく零れる。

照準から外れた尖りが口周りをくすぐるものの、和真が辿るのは、あくまで痛みを与えたと視認できる手形の範囲内。

「姫、舐めて、んひやつ、他も、やつ、違つ」

要望通り舌を使えば滑らかな肌が揺れ逃げるものの、返ってくる場所が手形の外なら、頬で受けて逸らしていく。

「アロマばかりズルいですわ。私だって、アロマと同じですのに」とすると頭上から聞こえる、アルエのいじけ声。

視線だけを上向かせれば、そこには二つの同じ顔が、和真へ潤んだ瞳を向けており。

（まるで巨人に見下ろされているみたいだな。どっちも俺より身長ないはずなのに……って、あれ？）

前後から双子の胸責めを受けつつ、ぼんやりそんな事を思った和真だが、ここでまたしても朦朧としてくる意識を知った。

しかし今度の原因は、何と考えるまでもない。
いわゆる一つの

酸欠だった。

覗きは相手が誰でも犯罪です。

双子と別れ、湯殿を出た和真。

待っていたのは和真を湯殿に押し込んだ、口元に揃えた指を押し当て「ぐふふふふ」と笑う長と、相変わらずちぐはぐな感じのする甲冑の一人だった。

「…………んだよ、じーさん。つーか、今までここにいたのが、あんたらっ」「…………」

ややぐつたり氣味の身体を壁へ預けながら聞えれば、癪に障る笑い姿のまま、長が首を振つて答える。

「いやいや。まさかまさか。そんな野暮な事はできませんよ、なあ？」

「…………」

長がやらじい田で田配せしても、甲冑は微動だにせず。

それでも構わない長は、一人で「そうじゅろううそうじゅろう」と頷くと、今一度、和真へ向けて「ぐふふ」と笑つた。

「ワシらは姫が長湯をされている間、近くの小部屋にて待機しておりました。いやあ、大変でしたなあ？ のぼせてしまうわ、酸欠で倒れるわ

「おい、何でんなこと知つて……」

訳知り顔の長に青筋を立てた和真。

しかし、自分が気を失つている内にあの一人が報告したのかもしれない、との考えに行き当たれば、気まずい顔を逸らすに留めた。何せ自分には、この悪夢内の設定で姫といつ付加価値がついているのだ。

のぼせたり酸欠したりすれば、今までの話の流れから、呪喚の総合責任者っぽい目の前のジジイに報告するのは当然だらう。

夢から悪夢へ。

完全にシフトさせた和真はそう判じ、対するジジイと長はそん

な彼をあざ笑う顔で、枯れた胸を大きく逸らして言った。

「それは勿論、覗いておりましたからな！」

「…………」

「長ことジジイの言葉を理解するまで、数秒 後。

「ほぐあつー？」

壁に身体を預けつつ、問答無用で縁の物体を蹴りつけた和真は、尻餅をついた頭へくらくらする額を押し付けた。

「い、痛いですじゃ、姫！ グリグリはお止め下され！ ワシの、ワシの残り少ない頭髪がつ！」

「あーもー、うるせー。頭が重いんだから仕方ねえだろ？ つーか、安心しろ。せつきあんたが盛大に倒れた時、ずり落ちた帽子の中身は綺麗につるつるだつたからよ。それ以上減りようがねえつて、そんなことよりだつ……！」

一度の気絶を経て、すっかりだるくなつてしまつた身体は、相手にも自分にも大声を許さない。

それでも高ぶつた気持ちから、淒みのある目でジジイを睨みつけた和真是、うこ座りの膝に頭より重い両手を預けつつ、額をグリグリ押し付けていく。

「覗いてたつてのは、いただけねえな、ああ？ どこの、どうやつて、どんなふうにして覗いたつて？ とつとと吐かねえと、この、ふつわふさの眉毛を片つ端から抜いてくぞ」

「おお、お止め下され！ 眉毛を失くしたら、ワシは、ワシは……特にどうともなりませんが」

「あの双子は知つてんのか？ てめえがこの眉毛の下で、どんな目で覗いていたのかをよ？」

「ひ、姫……若干性格変わつていませぬか？」

ジジイの長い眉毛を抓んで引っ張る和真是、眉毛下の余計な声を一切認めず、少しばかり血走つた視線を注ぎ続ける。

これにビクビクしていたジジイ、さすがにふざけ続けるのは不味いと思つたのか、嘆息すると首を縦に振つた。

「……ええ。双子は知つておりましたとも。いえ、あの双子こそが、覗き穴と申しますか、何と申しますか？」

「知つていた……そつか」

双子公認の覗きだと聞き、ふらつと離れる和真。

再び壁に背中を預けると、埃を払いつつ立ち上がった長へ、億劫そうに質問を重ねた。

「アイツらが知つてんなら、まだ良いとしても。アイツらが覗き穴つてのは？」

「はあ。それはロドフイーク・ラダドリシュア姉妹の田にございます。あの双子の田には特殊な魔法を掛けおりまして、湯殿での姫の行動は」

「るどふいー……？ 何だそれ？ アイツらの苗字か？」

「はい、然ようございます……じゃ？ と、お尋ねになられるといつことは、もしやあの一人、姫に挨拶もなく？」

眉毛の下に隠されているため、詳しい表情は判らないものの、きよとんとした様子で長が問うてくる。

どうやら長の覗きは、視力に頼つただけのものらしい。

和真はこれへ「いや」と前置くと、アロマヒアルヒ、二人の名を紡ぐべく口を開きかけた。

すると。

「ほひはああああああああああああああああつ…！」

「つー？ るせつ…！」

突如、素つ頓狂な声を上げ、その場で飛び跳ね出した長。頭どころか全身に響く大音量を受け、和真が顔を顰めたなら、興奮状態の長がぶんぶん首を横に振つてきた。

「も、申し訳ございませぬが、それだけは勘弁して下され…」

「それだけつて……一人の名前のことか？」

見事な慌てつぶりに推測した事柄が和真の口を出、今度は縦にぶ

んぶん首を振つた長は、どんな時でも離れない杖でトンンッと床を突いた。

「勿の論に」「やりますじや！　ロドフィーク・ラダドリシュア姉妹がロドフィーク・ラダドリシュア以外の名を口にしたということはつ！」

「こり」とは？

「ロドフィーク・ラダドリシュア姉妹が、姉にその名をお許しになつたところのことなのですじや…！」

ぱぱーんっ、と後ろに効果音が張り出されそうな勢いで、長がもう一度床を突いた。

しかし

「…………だから？」

和真にはいまいち伝わるものもなく、浮かぶのは怪訝な顔のみ。これへ「ふむ」と我に返つた様子でヒゲではなく、眉毛の先を擦つた長は、はしゃぎ過ぎた反省をするように、杖で自分の頭をぽりぽり搔いた。

「確かに。姉の反応は至極当然ですな。ロドフィーク・ラダドリシュア姉妹　アロマとアルト、一人の名前はワシの知るところでもござります。先程のはその、言つなれば迷信なのです」「迷信？」

「ええ。リジエレイシカに古くから伝わる迷信……女から名を許された男は、その女のいないところで、他の男より先にその女の名を告げてはならない。もし告げたなら、その女は風靈・シヨンナデルテにかどわかれ、一度と男の前には現れなくなる、といつ

「へえ？」

これまでの長の言動から、迷信に振り回されるタイプではない、逆に迷信すら振り回してしまったうだと思つていのだが、違つらい。

(案外纖細なんだな、じーさん)

和真が意外だと目を見張つたなら、また杖を突いた長が、中断し

ていた覗き話を再開させた。

「それは兎も角として。双子の目を通して姫の行動を覗いていたのは、不測の事態に備えるため。やましい気持ちは一切ございません。それが証拠に、双子の目を通していながらも、映す姿は姫だけに絞つておりました。これなる兵士も見ておりましたので、ワシをお疑いになられるのでしたら是非、この兵士にも確認して頂きたく」

「…………」

長が杖を向ければ、それまで直立不動だった甲冑が、ぎこちない動きで傾いてきた。

（つて言われてもなあ。コイツには助けられた憶えはあっても、そつちの面で信用できるかつて言つたら、正直判んねえし。……いや、そもそもアイツらの裸見てる俺が、とやかく言える立場でもないよな。あの双子が覗かれてるつて判つてたなら尚更だ）

反応を待つ長と甲冑を前にしてそんな結論に達したなら、和真は幾らかマシになつた頭を壁から離すと、ふらふらした背を伸ばして溜息をついた。

「ふう。判つたよ。あんたらの覗きは俺の行動を監視するためであつて、双子の、女の裸目当てじやないつて。……勘違いして悪かつたな」

最後の謝罪は、具合悪さも手伝つて、先程より理不尽に接してしまつた長へ向けて。

すると長は広い心を示すよつこ、「いやいや」と笑い混じりに手を振つた。

そして間髪入れずに言つた。

「裸目当ては勘違いではありませぬぞ？ 尤も、対象はあの双子ではございませんが」

「…………」

長の言葉が指し示す「対象」とは誰か。

即座に理解し、否定したい和真へ、長は更なる言葉を重ねてきた。
春のほがらかな笑みから一転、クセ者紛いの黒い笑顔を貼り付けて。

「いやー、身体つきは軟弱でしたが、なかなかジリして、いやはや立派なモノをお持ちで。そのひょうさで、まさカリジョレイシカでの平均よりやや大きめとは思いませなんだわ。ワシャてつきり、シガレットが良いところだとばかり」

その後の長の言葉が続かなかつたのは、言つまでもない。

どれだけ無体な仕打ちを受けようとも、次の瞬間にはぴんぴんしている、永遠の起き上がり小法師こと髙。

タネを明かせば、こんなでも一応リジエレイシカ屈指の術師、すかんぴんの魔力の、ないに等しい絞りカスでも、和真ぐらいの暴力は防げる結界を張っているらしい。

その割には「ひぎやつ」だの「ひぎょろつ」だの、妙な悲鳴を上げては苦痛に呻いていたのだが。

とはいえた、元々だるかつた身体で暴挙に出た和真が息を切らす頃には、長はけろりとした表情で先頭に立ち、湯殿へ向う時に使つたのとは違う廊下を杖で指してきた。

「さて。それでは参りましょうぞ、姫。いざやかん、めぐるめぐ官能の世界へ！」

（このジジイ……何だつてこんなに、無駄に元気なんだ？）

せえはあ、肩で息をしつつ、折角流した というか流された背中に疲労の汗を滲ませた和真は、再び壁に身体を押し付けながら、小躍りでもしそうな緑のジジイを睨みつけた。

（つーか、俺の腕も、何で動かない？）

蹴り転がしたり、頭突きをかましたり、思いつぐ限りの攻撃をジジイに試みたが、和真の腕は動きに合わせて振ることはできても、自分から動こうとはしなかつた。

特に右腕が酷い。

少しずつ整えられる息に、和真の中で腕への疑問が膨らんでいけば、くるりとこちらを向いたジジイが、「むふふ」とまたしてもいやらしい笑いをしてきた。

「とはいえた、姫はもう、堪能しておつましたなあ？」

「ああ？」

「ロドフイーク・ラダドリシュア姉妹に『じぞこます』ことです。じゃよ
！ 前後に左右に上下、隈なく双子に埋め尽くされていましたではあり
ませぬか」

「…………」

改めて思い出す、湯殿での自分。

女が苦手と言いつつ、実際怯えながらも、触れたり、揉んだり、
舐めたりした感覚は、和真に押し黙ることを強要してきた。
恥ずかしい。穴があつたら入りたい気分だ。

もしも、これをそのまま口にしたなら「おお、それはそれは。何
とタイムリーな。穴ならほら、この先に四つ、いや、姫さえ望めば
その三倍はありますぞ！」と、長がナチュラルに下ネタに走るのは
明らか。

ゆえにからかう聲音には、溜息をつて応えた和真。

ついでに付き合つていられないと、壁伝いに歩みを進めれば、ふ
と引っ掛けを覚えて長に尋ねた。

「前後に上下つてのは、まあ、いいけどよ……左右つてのは？」

「おや？ 憶えておられない？ 双子を強引に脱衣所へ戻されたで
はありませぬか。だからこそ、腕が動かぬのでしょうか？」

「腕……そうか、それで重く」

和真がようやく合点がいったと頷けば、訳知り顔で長が頷いた。
「然様。いわゆる、火事場の馬鹿力、というヤツですな。あれば人
間が本来出して良い範囲にない力を、一時放出するわけですから、
どうしたつて疲労等の反動は大きくなるのでしょうか」

しみじみした長の語りを聞き、「へえ」と和真は声を上げた。
(このじーさん、難点はあるが、やっぱり長と呼ばれるだけあって、
洞察力は鋭いんだな)

そう、和真が感心したのも束の間。

「それにしても、湯殿の全てに媚薬が使われていたというのに、気
軽に手を出せないほど、女へ苦手意識をお持ちとは。ロドフイーク・

ラダードリシア姉妹にも予め惚れ薬を仕込んでおりましたが、ほとんど無駄でしたな」

「おこひがひよい待て」のジジイ」

女嫌いではなく、苦手と判じた洞察力はさすがだった。
だがしかし。

「はて？ 何か姫を怒らせる」ことをしましたか？」

惚けているというよりかは、本気で判つていの首の傾げつぶりに、長の進行方向へと立ち塞がつた和真は頭の痛い顔をした。

「び、媚薬に惚れ薬だと？ 何だつてそんなもん！」

「はあ。それは勿論、事をスムーズに運ぶためですとも。萎縮して

いる姫を奮い立たせ、手始めに一人をお手つきして頂く為」

「だから、何でだ！？ 百歩譲つて、媚薬は判るとしても、だ。お

手つきだの、ほ、惚れ薬なんてっ！」

「これは異なることを申される。あの双子をお気遣い為せる姫ともあ
るつお方が、お判りになられませんか？」

「何を？」

「失礼ながら、いえ、当然の事ながら、ワシらは姫をよく存じませ
ぬ。我が妻により使用可のお墨付きを頂いた媚薬とはいえ、高ぶつ
た姫がどんな行動に出られるのかさえ判らぬのです。抑えられぬ猛
りをぶつける場所が必要であります。そしてその相手となる娘
に求められるのは、姫に殉ずる愛」

「だからって、それなら最初っから、媚薬を使わなきゃいいだけの
話じゃねえか！ 一人だってあんな格好で俺の 姫の世話をする
必要はないはずだろ！？」

「……はあ」

和真が理解できないと声高に叫べば、恐ろしく静かな溜息を吐い
た長は、ふざける口調もなく言つた。

それまでのひょうきんさを打ち消す、厳かな雰囲気を纏いながら。
「異世界から^{おとな}訪いし春告の姫よ……恐れながら、貴方は酷い勘違い

を為されている」

「勘違い、だと？」

「然り。我が言により少なからず語弊が生じた事は認めましよう。しかしそれは、無作為に選ばれた姫が、無用の責を自ら負われぬ為。先に申しました四人を貫く法、それが伴う重責まで、姫に与えではならぬゆえに。……姫におかれましては、法を達成することにのみ、尽力して頂きたかった」

再び溜息をついた長、しかしそれは極度の疲労を感じさせるほど深い。

転じて長は口元に笑みを浮かべると、眉毛をハの字にして続けた。「此度の姫は些かお節介ですの。否、お優しいといふべきか。四人の女を自由にしていいと言われば、^{いや}大抵の男は喜ぶでしょうに。姫はまず女を案じ、これを厭われる。誰ぞ意中の方がおいでかな？」

「いや全く。単に周りにいる女が録でもない奴らだつただけだ。アロマとアルエ……あの二人みたいのばつかだつたら、俺も他の奴らと大差なかつたんだろうけど」

（つつつても、あの一人のアレも、惚れ薬のせいだつたんだよな。段々大胆になつて可笑しいとは思つていたし、それなら納得できるが……なんだか、夢を壊された気分だ。いや、勿論これは悪夢には違ひないんだが）

世辞とも取れる長の言葉に軽く応えた和真は、その反面で、思つた以上に落胆している自分を知つた。

甲斐甲斐しい双子へ不用意にドキドキしてしまつたのが、余計に拍車を掛けていた。

和真是そんな思いを首振りにて払うと、「で？」と話を元に戻すことを要求した。

「俺がしている勘違い、姫には無用の責つてのは何だ？」

「それは……」

言いかけた長は、止めていた歩みを再開すると、和真を追い越して先を歩き始める。

語りを止めたといつまでも、歩きながらでも話せないだつといこ
たげな背中。

和真はこれを追いかけ、身体の向きを立はねだかる位置から、歩
き出す方へと変えた。

「うおつ！？」

しかし、幾らかマシになつても本調子ではない身体に加え、履き
慣れないサンダルのような靴、裾を引き摺るゆつたりした衣に、バ
ランスを崩してしまう。

と、その身体を掬い上げようとして、控えていた甲冑が和真の
左腕を下から担いできた。

「わ、悪い……ありがとう

「…………」

礼を言えば、無言で振られる頭。

距離が縮まつても、甲冑の重さに息を切れさせない相手は、和真
に肩を貸したまま歩き始めた。

「のまま支えていてくれるらしく。

（どうせなら、もつと早くやつて欲しかつた……いや、それは贅沢
か）

頭を振つて自分の中の甘えを取り除いた和真は、もう一度、甲冑
に向つて言つた。

「すまねえ、助かる」

「…………」

すると返つてきたのは、ぐぐもつた声。

幼くも感じられるそれに少しだけ目を見張つた和真は、ふつと小
さく笑うと、そろそろ話を再開し出すであつた長へ視線を投じた。

ホントのところ その2

和真と甲冑が足並み揃えて続くのを見計らい、長は前を向いたまま語り始めた。

「この世界へ望まず召喚された異世界の姫よ。貴方にこのような事を申しては、甚だ不愉快に思われるかもしれませんが、……我らもできることなら、異世界などから何者とも知れぬ男を招きとつなかつた」

「…………」

「特に、他四人の姫に身内がある者なら、誰もがそう思ひでしきう「それって……じーさん、あんたが？」

和真の問いに長はふつと笑う気配だけを寄越した。

「判りますかな、姫？ 遥かな昔の責を今なお取らされる者の身が。真に憤りをぶつけるべき相手はもういない。その血筋はあっても、彼の血を肅清せし系譜の先を、どうして責められようか。異世界の男においても然り。彼らはただ勝手に望まれ、役目を果たしただけ。稀にこれを逆手に取り、自由に振舞う者は知りませぬが」

「…………」

何やら薄ら寒い雰囲気に、和真がぐつと顎を引いた。

逆手に取つた憶えも、自由に振舞つた憶えもないが、これはきっと、遠回しに忠告しているのだろう。

勝手な振る舞いをすれば命の保障はない、と。

（か、考えてみりや、一夜に四人の女を、つてだけで完遂した暁にはバツサリ、なんて事もあり得るんだよな。優遇にしたつて、はいそれまで、だろ……な、なかなかシビアじゃねえか。さすがは悪夢）何が何でも、どれだけ目覚めが遅くとも、まだまだ夢だと思つている いや、思いたい和真は、乾いた笑いで頬が引き攣るのを感じた。

「そ、それが俺の勘違い？」

大きく間を開けてからの問いかけは、和真の声の震えと弱弱しさを隠せない。

ある意味、遠回しの死刑宣告を受けたも同然なのだから、仕方がないと言える。

だが、長はこれに首を振ると、小さく溜息をついて言った。

「いやいや。これは単なる愚痴ですじや。孫娘を差し出さねばならなんだ、情けないジジイの愚痴……」

（孫娘……そう、か。じゃあやつぱり……ん？

待てよ？）

危うくお涙頂戴というか、申し訳ない気分で終わるところだった和真は、何かとてつもなく大事なことを忘れていた気がして眉間に皺を寄せた。

（じーさんの孫娘、じーさんの孫娘　）

あともつ少し、あと少しで何かが判りかかる、その時。

「そうそう、ちなみにあの双子はワシの娘でしてな」

何故か朗らかに別の、かなり無理のある話を持つてきたジジイ。

「は？ 娘？ 孫じやなくて？」

思わず判りかけたことを手放し、驚くのに専念してしまった和真へ、肩越しに振り返った長は「むふふ」と頷いてみせた。

「娘、ですじや。何も驚くことはありますまい」

「いや驚くだろ、普通。じーさんから、あんな……ああ、いや、何でもない」

「あんな、何ですかな？ そこまで言いかけて、何でもない、で済ますこともありますまい。特に親としては非常に気になる」

「うつ」

長い眉毛に埋没した目が、きらりと光ったようにみえた。

聞く気満々の突き刺さる視線に呻いた和真は、少しだけ目を逸らすと、早口に言つた。

「可愛いって言おうとしたんだよ。ジーさんみてえな妖怪から、あんなのが一人も揃つて出てくるわけねえって！！」

「ほつほつほ。照れ隠しとはかわゆいですな、姫。……にしても妖怪とは。酷いですな。こんなお茶目な紳士を前にして」

「お茶目が過ぎるから妖怪なんだろ？ 大体、紳士つて何だ、紳士つて。つーか、ジーさん。あんたよお、孫娘だけでもアレだつてのに、何で関係ない双子の娘まで異世界の男なんかに差し出してんだよ」

「ほつほつほ」

「笑うトコ違うだろ！」

答える気がないのか、それとも当の異世界の男に、自分の胸中を明かしたくないだけなのか。

判別しない笑いを残し、再び前を向いた長は、かんつと杖を打ち鳴らすと、和真の意識を話の中に引き摺り込んでいく。

「さて、話を本題に戻しますぞ。先程から述べております姫の勘違いですが、それはつまり、一夜にして四人を貫く、という意に関して」

「はあ？ それこそ勘違いしようがねえじゃねえか。女と交われつてんだろ？ 僕に出来るかどうかは別としても」

「はい、そこっ！！」

「うおっ！？」

突如、ぶんつと風を切つてきた杖が、和真の鼻先に突きつけられた。

和真に肩を貸す甲冑が止まつてくれたお陰で、衝突は免れたものの、あと少し前に出ていたら、確実に昏倒、打ち所次第では一度と目覚めぬ眠りに突入するところだつた。

早鐘を打つ心臓に息を詰ませつつ、甲冑への礼もそこそこに、長を睨みつけた和真が吠える。

「何すんだ、このジジイ！ 危ねえだろ！？」

しかし啖呵を切られた長も負けてはいない。

凶器になりかけた杖を更に和真へ肉薄せると、肩を怒らせるよ
うにして言つた。

「じゃかしゃあ、この若造めが！ 青臭いペーペーのくせに、な
に上から田線で語つとるー よいか？ お主の勘違いとは、そこじ
やそこー！」

つんつんと杖で鼻を軽く突いた長は、売り言葉の買い言葉に驚き、
それでも口を開けたとした和真を遮るよひ、一転、静かな声で言
つた。

ともすれば、疲労さえ滲む、そんな聲音で。

「あのな、ちいと考えてみてはくれんかの？ そもそも、何故ワシ
らが異世界の男を招くのか。そうすれば、本来なら語らなくて良い
内実を何故お主に語つて聞かせているのか、その理由も判るはずじ
やぞ？」

引いた杖で肩を叩きつつ、向かい合つた長が呆れ氣味に眉を上げ
た。

和真の胸より低い背からの上から田線には、些かムツとしないで
もないが、どれだけふざけようとも相手は長と呼ばれる存在。
どつき回せたせいで、和真からの評価はかなり低いものの、和真
を「若造」「青臭いペーペー」と言えるくらい、長い時を歩んでき
てはいるのだ。

言いなりになるのは、甚だ癪だつたとしても。

「……あんたたちが召喚すんのは、呪いを百年間無効にするため
和真なりに長が指摘したい部分を考えつつ、召喚理由を口に出す。
すると長は「そう！」と大きく頷いて後、「ホンと咳払いして杖
を納めた。

「熱くなつてしまつたとはいえ、度重なる姫への非礼、どうぞお許
し下され」

てつきり頷いた先を語つのかと思つて、いきなりの謝罪に和真
は面食らつた顔をした。

（別にどつちでも変わんねえと思うんだが……よく判んねえな、こ

のじーさん)

対処に困った和真が「ああ」と投げやりに答えれば、深々下げた頭を上げた長、杖をトンッと床に突き、何度も頷きながら言つ。

「そう、我らが異世界から男を招くは、呪いを百年間無効にするため。それもリジョレイシカ全体における お判り頂けますかな、姫? 異世界の姫にとつてはただの口だつたとしても、我々にとっては死活問題。出来れば、で済む話ではないのです。して貰わなければならぬ。だからこそ、四人の姫も、その家族でさえも、姫とのコトをを容認している。本来であれば忌避する惚れ薬さえ用いる。手段なぞ選んでおられぬのです」

「…………」

言葉もなかつた。

確かに、自分は勘違いしていたと和真は思った。

長から話は聞いていたはずなのに、まともに聞いてはいなかつたと思い知つた。

(夢だから、なんて屁理屈だよな。夢だつたとしても、もう少し考えてみれば良かつたんだから)

為す事ばかりが自分の中で強調されてしまい、蔑ろになつていた本当の、彼らの理由。

和真は手段であつて、目的ではない。

だがしかし。

「だからつて、俺が容認できるかよ」

話は判つた。

勘違いしていた部分も判つた。

かといつて、和真の事情が何かしら変わるわけでもないのだ。

「そもそも経験すらないのに、一夜に四人も、どうしようと?」

キス一つ満足に済ませていない身に、何が出来るといふのか。

(……風呂場でのアレは、まあ、置いといて)

瞬間、浮かんだ双子の裸体と感触に少しばかり顔を赤くしたなら、
「え……？」と漏れる声。

しかも長からではなく、何故か耳元で。

目を丸くして左隣を見やれば、甲冑の真正面ビアップが出迎える。迫力のあるそれに固まってしまった和真だが、ふと考えれば漏れた声の意味もすんなり理解できた。

（そつか、そうだよな。コイツだつて俺が姫……つて自分で言うのも段々慣れてきて、心底どうかと思うが。兎に角、呪いをさつさとどうにかできると思って、こうやって肩まで貸してくれるのに。つーか、この反応。好きな奴でもいるつてか？ それとも既に彼女持ち……）

野次る気持ちは全くないが、彼女ナシで見知らぬ女の下へ向わねばならない自分を思うと、何かムカつく。

世界の危機は一先ず置いておき、暫定彼女持ちの甲冑に冷笑した和真は、力の戻ってきた左腕で彼の頭を締めると、皮肉混じりに言った。

「んだよ。女経験皆無で悪いか、この種馬が。てめえらみてえに、見境なくババコやつてるのが格好良いと思つたら大間違いだ。そういうのはな、だらしないって言つんだよ、クソが。複数人同時に孕ませて、訴えられちまえ、色男」

今まさに、自分がその「種馬」で「見境なくババコ」しなければならない「クソ」の「色男（？）」になろうとしている事実から目を背け、言い切った和真は、甲冑の頭を解放すると同時に離れていった。

ムカついたからではない。

ムカついて、それをそのまま口に出した手前、甲冑の肩を借りるのは物凄い罪悪感を招くのだ。

しかも甲冑が彼女持ちは暫定、それも単なる和真の思い込みでしかない。

「もういい。身体もだいぶ良くなつたからな。今まで支えてくれて

ありがとう

だからこそ、投げやり気味にではあるが、一応礼を述べた和真は、完全に回復したわけではない身体をよろめかせつつ、長の方を向こうとし。

「お、おい？ もういいって」

だといつのに、またしても和真を支えようとする甲冑の動きに、ぎょっとして身を捻る。

何を言われようとも、あくまで任務に忠実に生きようといつのか。ありがた迷惑な甲冑に、罪悪感を引き摺つたままの和真は逃れるべく、腕を払い。

「 うえ？」

拍子に甲冑の兜が地に落されば、さりと流れた金の光に、和真の目が点になった。

雷神登場

素顔が露になつたせいか、その場で甲冑を脱ぎだした元・甲冑は、「ふう」と息をつくと、汗に張り付いた髪の毛をぐしゃぐしゃ梳かしながら、手甲のないそのたおやかな手を長に向けて言った。

「すまぬが長、何か拭く物を頼む」

よく通るその声は、滑らかでいて染み入るように甘く、それでいて並の男には決して出せない高い音階。

田を極限まで見開いて、彼の人物を捉えて離さない和真に対し、ひきひき変な笑いの堪え方をした長は、どこからともなく取り出したタオルを元・甲冑へ差し出した。

これを受け取つた元・甲冑は、頭と露出している肌を荒々しく拭くと、最後にタンクトップの中へタオル」と手を突っ込んで弄り、汗を取り除いていく。

その度、タンクトップの内側を歪にするソレは

「長よ、助かつた」

「雷公姫……そこでワシに使用済みタオルを渡されても、首に巻いておけば良いではありませぬか」

ぐしょ濡れになつたタオルを、そもそも然のよつて押し付けられた長は、元・甲冑の容姿を見ておきながら嫌そうな顔をすると、口調まで変えて彼女を呼んだ。

そう、甲冑の中身は女、それも凄絶な美貌の持ち主であった。

「どに隠していたんだとつてこみたくなるほど、豊かに波打つ長い髪はけぶるような金。

甲冑に包まれていたせいだらつ、仄かに上氣した白い頬には、そばかすの類が一切見当たらない。

光に濡れた瞳が縁取るのは、強い意志を感じさせる紫の瞳。

形の良い鼻の下には俄かに笑んだ薄紅の唇があり、高飛車や傲慢といった印象を抱くものの、これがまた彼女の姿にはとてもよく似合っていた。

そんな元・甲冑 雷公姫は、長の非難に目を細めると「ふん」と鼻で笑つた。

「何を言う。私はこれから春告の君に肩を貸さねばならんのだ。そんな薄汚い濡れタオルなぞ、首に掛けておける訳がないだろ？」「う、薄汚い……それを判つていて、ワシに託すと？」

あんまりな扱いに長がほとほと困つた顔をすれば、腕を組んで見下す雷公姫が言った。

「好きだろ、こういう扱い」

「……え、じーさん、そういう趣味の奴？」

聞き捨てならない雷公姫の言葉。

これに我を取り戻した和真が一步引けば、長が慌てた様子で首をぶんぶん振つてきた。

「いやいやまさか！ ワシとて誰でも良い訳ではありますぬ！ 無碍に扱われて嬉しいのは我が妻たるあの人まで！ だというのに皆、ワシの性癖を変に勘違いして」

「否定は、しないんだな？」

「あ、ですが、姫もなかなかどうして、ワシを虐める才がおありのようだ」

「……だから俺が何しても、そこに異議はなかつたってか」
遅れて知つた、ぞつとする真事実。

大いに一步、長から後退すれば、和真と長のやり取りを完全に無視した雷公姫が、二人の間に流れる絶妙な空気を搔き消す明るさで言つ。

「そうそう、長よ。この甲冑も片付けておいてくれ。我が家の中庫にそれらしく置いてあつた年代物だが、見ての通り重いわ動きにくいわ、換金する価値もないクズ鉄だわで、身分を隠すしか能がない。棄ててくれても私は構わんが……父や祖父が煩くてな」

「つまりは棄てたら最後、
ワシに全責任を擦り付けるおつもりです
な？」

頼むぞ」

いつそ清々しいくらい爽やかに、長のジト目を受け流した雷公姫は、そんな過去をわざと視野外に置くと、和真に向って穏やかに微笑んだ。

春告の君よ 私が色男でなくて不器か?」

111

雷公姫の紫の瞳に自分の姿が映つた途端、再び全身を固まらせた和真は、首が千切れそうなほどぶんぶん横に頭を振つた。

「春告の君？」

和真のこの様子に不思議そうな顔をした雷公姐だが、止まる気は

ならしくなんどん近づいてくる。

は留まるところを知らず。

ほぼ同じ目線が至近ま

和真は両手を前に翳した。

「ちよつ、ストッ
ふ」な?

手の平に納まる、少しばかり硬いソレ。

擬音を口にした割に、何であるか、の理解を忘れた和真は、硬さを解すように揉み揉み。

କୁଳପତ୍ର

「ぐほへあ！？」

思いつきり振り被られた雷公姫の拳が、顔面を狙つて襲い掛かつてきた。

モーション自体は某幼馴染の速度に劣るもの、光を纏つて輝く現実離れしたエフェクトはヤバい。

すかさず、不意打ちにより鍛えられた反射神経で、壁伝いにしゃがみ込めば、ズドンッと後ろに下がった頭。

何なんだと考える前に、ぱらぱら落ちてくる破片を捉え、ぱつと顔を上げた和真は、そこに見てはならないへこみを認めてしまひ。光が収束した雷公姫の拳を中心に、半径五十センチの円を描いて陥没した壁。

（さ、さすがに明日香でもコレはない……）

おじおじこの少年漫画だこりや？ と乾いた笑いが、和真の口角を震えさせる。

と、そんな和真を上から見下ろす紫の瞳が、自分の影の中で光るのが見えた。

思わずギクリと顔を強張らせたなら、拳をぐりっと壁に押し付けた雷公姫が、今にも泣きそうな声で言つた。

「我が君……お願い致します、お手を」

「お手？ てえつ！？」

言われて氣づくのも間抜けな話だが、ようやく視界に自分の両手を認識した和真は、その手が雷公姫の両胸を下から齧掴んでいるのを目撃した。

驚きのあまり、ついつい揉んでみれば「いあっ」と悶えた雷公姫が、潤み責める視線を送つてくる。

「わ、悪い……」

和真はゆっくり手を離して謝罪すると、ぎくしゃくした動きで雷公姫の横から這い出、立ち上がつては拳が引いていくのを尻目に、温もりの残る手をにぎにぎ動かして見た。

（小振りだ……小振りだつた……。アロマとアルエのを先に触つてしまつたせいで、最初は判んなかつたけど、確かにアレは胸だ。しかもただ柔らかいだけじゃなく、引き締まつていいつてーか）

「どーせ私の胸は小さいさ」

「……へ？」

「ぱつりと零される、力のない咳き。

反し、ぞくりとした悪寒を感じた和真は、俯き加減でまたしても

光る拳を震わせる雷公姫の姿を見た。

（ヤバい。反応はアロマやアルエと違つて、とても正しいと言えるが……喰らつたら確実に死ぬ拳だぞ、アレ！ そ、そりだ、こういう時にこそじーさん、長が何とかして）

迫る死の予感に、和真の目が雷公姫を視界に入れつつ、長の姿を探す。

程なく見つかる縁の長衣は、しかし。

（……何やつてんだ、あのジジイ。こちとら絶体絶命のピンチだつてのに、悠長に甲冑持ち上げよつとしてんじやねえよー。こいつ向け、ジジイ！ デカい音がしてただろ つて、あ）

その時、和真は確かに聞いた。

他の音になどかまけている猶予はないといつのこと。

不自然な格好で固まつた長、その腰がピキキッと嫌な音を上げるのを。

（……よし、自分で何とかしよう）

自業自得だとか、年寄りの冷や水とか言わないし、思わない。

だから腰を痛めた矢先、こちらに助けを求めるようとする長の眉毛を、わざと視界から遠ざけても、自分には何ら関係のないことだ。長には長の、和真には和真の戦いがある。

長は和真のピンチを後ろに、せつせと甲冑を運ぼうとしていたのだ。ならば和真も、長のピンチを死角に、自分の身を守つて良いはずだ。

雷神様の割と大きくて、あつせい悩み

雷公姫に全神経を集中させた和真。

とりあえず腕力で抑えるのは無理だ、と女相手に男として少々、いや、かなり情けない即断をした彼は、自分の直感を信じて両手を挙げた。

勿論、応戦するためではない。

降参の意思を示すためである。

気分は猛獸と絡まなくては明日がない、若干飽きられ氣味のお笑い芸人といったところか。

「まあ何だ。と、とにかく、落ち着こつ」

頼りない笑みを顔に貼り付け、自分は敵ではないですよー、と必死にアピールしてみる。

「私は十分落ち着いている……胸が小さくたつてつつ……！」

効果は抜群だった 逆の方向に。

雷公姫がぐつと拳を握り締めれば、更に増していく危険な金の光。（ら、雷公……つて確かに、かみなり様つて意味だつたよな。なるほど、言い得て妙じゃねえか。つーか凄えな、ジジイの翻訳魔法。文字まで勝手に頭の中で変換していやがる）

さつきより格段に近くなつた死の気配に、どうでもいいことを思つた和真は、逃避しがちな頭を勢い良く振ると、しつかりしろ俺！と自分を叱咤する。

反面、このまま殴り飛ばされれば夢から醒められるかも、という淡い期待が脳裏を過ぎつてしまつた。

この期に及んで、いや、こんなファンタジックでエキサイティングな展開が目の前にあるからこそ、夢であつて欲しい和真、それでも葛藤は続き。

（しかしよ。もしも、もしも仮にこれが本当に現実だとしたら……間違いなく死ぬよな、俺。で、だ。もし夢だったとしても、こんだ

け現実味のある夢なら、全く痛くないってのも無理な相談じゃね？（過去、夢で自分の頬を抓つた憶えのある和真は、それが普通に痛かつたことを思い出していた。）

脈絡もなく高いところから落ちる時には、必ずといって良いほど目覚めが訪れ、もしくは視点が急に別の場所に移っている。

それは傷つく場面だったとしても変わらず。

（そうだよ。さつきあの怖い奴に刃を当てられた時だって、嫌な感じがしたじやないか）

脳裏に過ぎる、「ひひっ」と笑う不気味な老人の、刃を持つ姿。ひやつとする怖気に、和真は再び胸に恐れを抱くと、そこを軽く握り締めて唾を飲み込んだ。

（痛かったから夢じやない、なんて思いたくもないが、どっちにしろ、喰らえばひとたまりもない事に変わりはない）

夢か現実かよりも、生きるか死ぬかの瀬戸際。

そう思い定めた和真は、けぶる金髪の中に暗い顔を隠した雷公姫へ、もう一度声を掛けてみた。

死ぬのも痛いのも御免だ、そんな感情に背景付けられた最初の第一声は。

「ち、小さかつたら駄目なのか？」

（何言つてんの、俺！？）

いきなりストレートに、相手が問題としている部分を否定しに掛かつた自分。

頭を抱えて壁にぶつける、または即座に訂正を加えたいところだったが、金の翳りの中から紫の瞳が覗くのを見ては、もう遅いと知つた。

「貴方に……最初から胸のない男に何が判る」
(ご尤も！)

低い声に滲む苦悩。

即座に首を縦に振つて賛同したい和真だつたが、そんなことをすれば命はない。

和真は背後にびつしり冷や汗を搔きつつ、持てる気力の全てで声の変化を抑えると、至極眞面目そうに言つた。

「いや、俺には」

「ふん。判る、とでも申されるか？ 平均より大きめだという貴方に。小さい者の気持ちなどつ」

「…………」

被せられた雷公姫の言葉に、押し黙つてしまつた和真。

「そうだよな、俺には判るはずもない などと思ったからではない。

（……そうだ、そうだよ。この女はジジイと一緒に、人の裸を無断で見やがつて）
甲冑が女だつたという衝撃ですっかり抜け落ちていたが、ジジイは確かに言つていた。

これなる兵士も見ていた、と。

そして甲冑 雷公姫もぎこちなくではあるが、頷いていたのだ。

これまでの流れの全てが和真の脳裏を過ぎつていく。

特に湯殿での、間の抜けた自分の行動が事細かに、鮮やかに再生されていつたなら 。

「黙れ、この痴女！」

「なつ！？」

勝手に視られた羞恥と、それを味わう羽目になつた理不尽さ。

全身を茹蛸のように真つ赤に染める、様々な激情から和真が叫べば、突然の反撃に雷公姫が言葉を詰ませた。

まさか自分を宥めようとしていた相手から、いきなり痴女呼ばわりされるとは思つていなかつたのだろう。

変に動搖する雷公姫が我を取り戻す前に、和真は畳み掛けるが如

く、堪つていった鬱憤を吐き出した。

「なんだよ！？ 否定すんのか、覗き魔が！ 平均より大きい？ 知るか、んなもん！ 何だ？ てめえは大きけりや何でもイイってか？ それなら馬の股座にでも潜り込んで、でけえの咥えていやがれ、このクソアマの色情魔！」

「し、色情……」

「違うつてのか？ お前、さつき言つてたじやねえか。俺が経験ないつてえのを聞いて、え？ とか何とか。男と見たら、すぐそういう発想に向う、てめえの腐れ外道な考えに俺を当て嵌めんな！ 経験なくて何が悪い？ トランポリン宜しく、騎乗でヒヒヒヒ喘ぐあばずれよか、遙かにマシだらうが！！」

「とらんぱりん……？ もじょつで……つて！？ わ、私はそんなあばずれでは」

「じゃあ何か、カウガール気取りか？ はいよーシルバー、つてそりや馬か」

自分の言葉をへつと鼻で笑つた和真は、「ま、馬並みがお好きなお似合いだな」と雷公姫へ吐き捨てた。

この頃にはもう、彼女の光る拳で殴られても構わないとさえ思い始めていた。

言い過ぎた後悔からではない。

言つてやつたという満足感からだ。

言い返す暇もなく、わななく雷公姫の拳ににやにやした笑みまで浮かんでくる。

思えば和真のこれまでの人生、女にはしてやられてばかりだった。夢だらうが現実だらうが、正面きつてこままで言つてやつたのは初めてだった。

しかもこんな、在り得ないくらいの美人に向つて、だ。

だからこそ、すかつとした胸の内そのままに、同じ背丈の雷公姫を見下す和真。

すると、和真の暴言が余程効いたのか、目を潤ませた雷公姫が言

つた。

「……つまり、春告の君は、胸の大きさにほこだわりがないと？」

「あ？……うん、まあ、特にはねえけど」

てつくり何かしらの反論が来ると思つていただけに、肩透かしを食らつた和真是、優越感を削がれて普通に返事をした。

何か違うという思いのまま、頭を搔いて眉間に皺を寄せれば更に、「ですが、あの双子に挟まれた時は」

「あーもー、うつせえな！ お前はアレか？ 僕が心底愉しんでたとでも言つのか？ そりや、気持ち良くなかったつて言つたら嘘になるが……別に望んでああなつたわけでもねえし？ アロマとアルエにしたつて、惚れ薬のせいでああなつてただけ。大体、あの胸のせいで俺は窒息寸前だつたんだぞ？ トライアゴになつていなのが奇跡だろ」

ややうんざりした気分で思い出すのは、胸責めに陥落した意識が、取り戻された後の事。

しつかり着込んで和真を介抱していた双子は、彼の目覚めを知ると同時に、涙ながらに許しを乞つてきた。

自分たちを嫌いにならないで欲しい、と。

正直、和真是女の涙に弱い性質だった。

勿論彼の経験上、弱いというのは庇護欲をくすぐられる意味ではなく、恐怖心を揺さぶられるという意味でだ。

和真にとつて、女の涙は文字通りの武器いや凶器、もしくは嵐の前兆。

女の涙に関わる事柄は、多少の無茶でも折れおかないと碌な目に合わない それが和真の持論であった。

そんな和真の許しを得た途端、手に手を取り合つて喜ぶ双子に、涙を回避できた彼は安堵しつつも一言だけ釘を刺していた。

この悪夢が続くとして、と心の中で前置きながら、どうしても湯浴みの世話をしなければいけないなら、今度はしつかり着込んで

て欲しい、と。

惚れ薬を盛られていたせいだろう、双子は渋々といった調子ながら了承してくれた。

和真是これで胸責めは回避できたとほつとした。

だというのに、そんな自分が胸にこだわる訳がない、そんな思いで雷公姫を胡乱げに見やれば。

「？ どうしたんだ、お前？」

暴言で潤んでいたはずの紫の瞳が、妙に艶かしく煌き揺れていた。怪しいその気配にたじろぎ、和真の足が逃げを開始すべく動きかけたなら、雷公姫が恥かしそうに顔を俯かせた。

まじつく唇の動きに注意した和真が、逃げの体勢を整えた矢先。

「で、では……春告の君は、私の胸が小さくても構わないと？」

「あ、ああ。つーか、お前の胸ってそんな、言つほど小さいか？

触つてから言つのも難だが、そこにあるし、丁度良い大きさだと

」

「つ、本当にっ！？」

正直な感想を口にしながらも、よし今だ！と逃げに入ろうとした和真。

だがその前に、雷公姫のいる方から殊更眩い光が届いたなら、そちらをちらりと見て、

「げっ」

絶句した。

「良かつた……」

そう発した声は確かに雷公姫のものなのだが。

（ちつとも良くねえ！）

逃げる足さえなくして、その場に尻餅をついた和真の眼前。

そこには人の形をした電気の塊があり いや、微妙にだが、光の先には雷公姫の嬉しそうな表情がちらほら見えていたため、拳に纏っていた光が全身を覆った結果なのは判る。

判るが 判らないのはここから。

(ちょ、ちょっと待て？俺はついせりあき、あんたを罵倒したはずだよな？それなのに、何をそんな嬉しそうにして)

十字架の如く広げられた両腕。

近寄る足に、下がる腰は重く。

「待つ

言えたのは、それだけ。

「小さくても良いんだ！！」

その言葉を合図に、光る雷公姫に抱きつかれた和真は、全身を駆け巡る衝撃に、声にならない悲鳴を上げると、本日何度目かの強制終了を体験するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638q/>

少年よ、
を抱け
～風木和真の場合～

2011年7月10日03時50分発行